

平成 29 年度

順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 修士論文

日本の若者のスポーツ活動とパーソナリティの分類
— Sport England の若者調査の手法を用いて —

学籍番号 4116045

氏 名 目良 夕貴

論文指導教員 小笠原 悦子

合格年月日 平成 30 年 2 月 19 日

論文審査員

主査

齋藤 由紀

副査

伊藤 真紀

副査

小笠原 悦子

目次

第1章 緒言.....	1
第1節 研究の背景.....	1
第2節 研究の必要性.....	2
第3節 研究の目的.....	3
第4節 用語の定義.....	3
第1項 若者.....	3
第2項 This Girl Can	3
第3項 パーソナリティ.....	3
第4項 態度.....	3
第2章 先行研究.....	5
第1節 Youth Insight Pack における研究.....	5
第2節 Under the skin における研究.....	6
第3節 Go Where Women Are における研究.....	7
第1項 モチベーション.....	7
第2項 女性のバリア.....	8
第3項 行動変容ステージモデル.....	10
第4項 行動変容ステージ、モチベーションおよびバリアの関係性.....	11
第4節 先行研究のまとめ.....	12
第5節 リサーチクエスションの設定.....	12
第3章 研究方法.....	13
第1節 調査1.....	13
第1項 調査方法.....	13
第2項 分析方法.....	16
第2節 調査2.....	19
第1項 調査方法.....	19
第2項 倫理的配慮.....	20
第3項 分析方法.....	20
第4章 結果.....	22
第1節 調査1 (Sport England の調査)	22

第1項	対象者の個人的属性	22
第2項	各尺度の構成概念妥当性の検討	23
第3項	スポーツへの関与スコアの算出	27
第4項	潜在クラスモデルによるクラスタリング	27
第5項	潜在クラス分析の結果	28
第2節	調査2 (T 県の調査)	29
第1項	対象者の個人的属性	29
第2項	各尺度の構成概念妥当性の検討	31
第3項	スポーツへの関与スコアの算出	35
第4項	各因子・項目における男女の比較	35
第5項	潜在クラスモデルによるクラスタリング	39
第6項	潜在クラス分析の結果	39
第7項	クラスターにおける女性の特徴	51
第5章	考察	53
第1節	パーソナリティを算出するための尺度の検討	53
第1項	スポーツへの関与スコア	53
第2項	態度に関する8因子	53
第2節	潜在クラス分析の結果	54
第3節	クラスターにおける女性の特徴	55
第4節	各クラスターの名称	55
第6章	結論	57
第1節	研究の概要	57
第2節	研究の限界	57
第3節	今後の課題	57
第1項	対象者	58
第2項	研究方法	58
	引用・参考文献一覧	59
	Abstract	64
	謝辞	65
	添付資料：質問紙	66

図・表リスト

図 1. イギリスにおける若者のスポーツに対する態度と行動.....	5
図 2. イギリスにおける若者全てに当てはまる経験やメッセージ.....	6
図 3. 判断への不安.....	10
図 4. 判断への不安の具体例.....	10
図 5. 行動変容ステージ、モチベーションおよびバリアの関係性.....	12
図 6. 調査1の対象者の年齢.....	22
図 7. 調査1のスポーツへの関与に関する項目におけるSEMの結果.....	24
図 8. 調査1の態度に関する8因子におけるSEMの結果.....	26
図 9. 調査2の対象者の主な通学手段（複数回答）.....	31
図 10. 調査2の対象者の通学の所要時間.....	31
図 11. 調査2の態度に関する8因子におけるSEMの結果.....	34
図 12. T県における6つのパーソナリティ.....	56
表 1. スポーツへの関与に関する変数.....	14
表 2. 潜在クラス分析に用いた変数.....	18
表 3. 調査1の対象者の年齢の最大値、最小値、平均値、標準偏差.....	22
表 4. 調査1における対象者の現在、教育を受けているか.....	23
表 5. 調査1のスポーツへの関与に関する7項目における探索的因子分析の結果.....	23
表 6. 調査1の態度に関する8因子における平均値、標準偏差、信頼性係数.....	25
表 7. 調査1のBICの値.....	28
表 8. 調査1におけるクラスター別に見た性差・年齢差・運動頻度（%）.....	29
表 9. 調査1におけるクラスター別に見たスポーツへの関与スコアの平均値、標準偏差.....	29
表 10. 調査2の対象者の年齢の最大値、最小値、平均値、標準偏差.....	30
表 11. 調査2の対象者の運動部への所属状況.....	30
表 12. 調査2の対象者の文化部への所属状況.....	30
表 13. 調査2のスポーツへの関与に関する項目における探索的因子分析の結果... ..	32
表 14. 調査2における態度に関する8因子の平均値、標準偏差、信頼性係数.....	33

表 15. 調査2におけるスポーツへの関与スコアの値と t 検定の結果.....	35
表 16. 調査2の態度に関する8因子における男女の平均値、標準偏差、t 検定の結果	36
表 17. 調査2の各項目における男女の平均値、標準偏差、t 検定の結果.....	37
表 18. 調査2の男女におけるモチベーションの有無に関する χ^2 検定の結果.....	38
表 19. 調査2の BIC の値.....	39
表 20. 調査2におけるクラスター別に見た性差・運動頻度 (%)	40
表 21. 調査2におけるクラスター別に見た運動部の所属状況 (%)	40
表 22. 調査2におけるクラスター別に見た文化部の所属状況 (%)	40
表 23. 調査2におけるクラスター別に見たスポーツへの関与スコアの平均値、標準偏 差	41
表 24. 調査2の各クラスター間における態度に関する8因子の平均値、標準偏差、お よび MANOVA の結果.....	43
表 25. 調査2の各クラスター間における態度に関する8因子の ANOVA の結果 (そ の1)	44
表 26. 調査2の各クラスター間における態度に関する8因子の ANOVA の結果 (そ の2)	45
表 27. 調査2の各クラスター間における各項目の平均値、標準偏差、ANOVA の結果	47
表 28. 調査2のモチベーションにおける各クラスター間の χ^2 検定の結果 (その1)	49
表 29. 調査2のモチベーションにおける各クラスター間の χ^2 検定の結果 (その2)	50
表 30. 調査2の各クラスターにおける男女差の χ^2 検定の結果	51
表 31. 態度に関する因子における信頼性係数の比較	54
表 32. 各クラスターの名称	56

第1章 緒言

第1節 研究の背景

2012年の文部科学省¹⁸⁾によって行われた調査により、子どもの運動・スポーツの実施時間の二極化が明らかとなった。中学生において、運動・スポーツの実施時間が1週間に60分未満の生徒の割合が、男子では9.3%、女子では31.1%という実態が示されている。スポーツ庁³⁹⁾においても、女性の運動・スポーツの実施率は、中学生の80%から高校生で大幅に下落し、18歳で33.7%と底を迎えることが示された。また、運動・スポーツ実施率だけでなく、21.7%の女子中学生が、スポーツが「嫌い」・「やや嫌い」と答えていることから深刻な問題である⁴⁰⁾。

このような背景から、スポーツ庁⁴¹⁾は、第2期スポーツ基本計画に、スポーツを通じた女性の活躍を促進することを施策目標の一つとした。そして、スポーツのあらゆる分野での女性の参加を求めた「ブライトン・プラス・ヘルシンキ 2014 宣言」に、日本を代表する主要な組織であるスポーツ庁、日本スポーツ振興センター、日本オリンピック委員会、日本障がい者スポーツ協会、日本体育協会の5つの組織が署名した。

「ブライトン・プラス・ヘルシンキ 2014 宣言」は、行動原則を主導とする10の原理・原則が提言され、そのうちの一つに、女性がスポーツを行いやすい機会やプログラムの提供をしていくことを記している。スポーツ庁⁴²⁾は、スポーツに対するニーズや阻害要因等に関する調査や顕彰制度等を通じて、民間事業者等による新たなルールやスタイルのスポーツの開発・普及を促進し、適性等に応じたスポーツの機会を提供することを発表している。

日本と同様に、女性の運動・スポーツ実施率が低いという課題の解消に取り組んでいるイギリスでは、Sport Englandが2014年からThis Girl Canというキャンペーンを立ち上げた。定期的に運動をしている女性が、男性よりも約175万人少ないことを受け、ターゲットを14歳から40歳までの女性だけに絞ったキャンペーンであった。そして、結果的に26万1000人の女性が新たに運動を行い始めたという画期的なキャンペーンとなった¹⁴⁾。そして、2017年現在では、This Girl Canの第2弾が始まっているだけでなく、世界各国でThis Girl CanのPR映像がYouTube等で視聴され、女性にインパクトを与え続けている。このキャンペーンが成功した背景には、女性特有の問題を徹底的に調査し、キャンペーンに結びつけたことがあった。

第2節 研究の必要性

我が国においても、男性よりも運動・スポーツ実施率が低い女性に焦点を当て、女性が運動・スポーツを行いやすい機会を提供していくことが必要になる。特に、日本では運動・スポーツの実施率が中学生をピークに、18歳で最も低くなることや、10代の女子は、男子に比べ、早い段階でスポーツを辞めてしまうことから^{8) 49)}、女子の高校生に焦点を当てる必要がある。

日本においてもこれまでスポーツ参加の阻害要因を突き止めるための研究が行われてきたが^{10) 17) 21)}、高校生のスポーツ参加の阻害要因を研究した論文はほとんど存在しない。

笹川スポーツ財団²⁷⁾は、日本の10代の若者が、運動・スポーツを行う理由として、「楽しいから」、「からだを動かしたいから」、「体力をつけたいから」、「うまくなりたいから」などがあることを明らかにした。それだけでなく、2006年の「青少年のスポーツライフ・データ」²⁶⁾において、過去1年に運動・スポーツを全く行わなかった「非実施者」の理由として、「勉強や習いごとで忙しいから」、「面倒だから」、「疲れるから」、「つまらないから」、「へただから」等の回答があったことを報告している。

また、体育が嫌いな者は、体育とスポーツに対するイメージが同等になっており、スポーツも嫌いになってしまっている傾向にあることを指摘している²⁰⁾。

糸野ら¹⁴⁾は、スポーツへの関わり（スポーツ参加）を分析するには性差をあらかじめ理解する必要があることを示唆した。特に、女子の場合は本人自身の要因よりも本人を取り囲む直接的な環境や重要な他者の励ましに、より影響を受けやすく²⁾、女性に対してのスポーツのモチベーションを高める方法を考えるべきであるという²²⁾指摘がなされた。

運動・スポーツを促進するための研究として、運動行動を習慣化させるための試みが日本においても行われてきた^{3) 9) 19)}。その中の一つである変容ステージに着目した介入実験では、短期間の効果は認められているものの、長時間の効果は十分に検討されていない³⁾。

徳永ら^{44) 45) 46)}によりスポーツ行動を予測するために作られた、スポーツ行動診断結果（DISC）においては、スポーツ意識による類型化を行うため、クラスター分析が用いられた。しかし、スポーツ行動診断結果（DISC）はスポーツの意識として用いられた態度、信念および規範信念の程度の高さにより4つの型に当てはめて考えるものとなっており、個性や特徴を見るまでには至らなかった。

This Girl Canのキャンペーンの背景には、Sport Englandによって行われた数々の研究が基となっている。その報告書の1つであるUnder the skinで用いられた若者の6つ

のパーソナリティは、潜在クラス分析が用いられた。Sport England³⁴⁾ は、運動・スポーツを行うための理由や目的はそれぞれの個性によって違うことを明らかとし、個性ごとにアプローチをする方法を提案した。そして、その研究を基としたキャンペーンであった This Girl Can は大成功を収めた。

しかし、Sport England が用いた6つのパーソナリティを算出するための分析方法やプロセスはどこにも記載されておらず、ブラックボックスの中に存在している。

第3節 研究の目的

本研究の目的は、日本における女子高校生の運動・スポーツ参加促進のための調査項目の検討を行うことである。そのため、Sport England で行われた調査内容を再分析し、調査項目の検討を行うことである。

第4節 用語の定義

第1項 若者

本研究では、Sport England と同様に、14歳から25歳を若者と定義した。

第2項 This Girl Can

本研究では、This Girl Can とは2014年から Sport England によって行われた女性の運動・スポーツ参加促進のキャンペーンと定義した。

第3項 パーソナリティ

本研究では、Sport England によって2015年に発表された研究報告書(Under the skin)で用いられた「態度、モチベーション、スポーツとの関わり方および個人的属性」を考慮し、潜在クラス分析によって分類されたグループをパーソナリティと定義した。

第4項 態度

本研究では、Sport England³⁴⁾ によって用いられた、1) Self-confidence (自信)、2) Self-contentment (自己満足)、3) Being productive (生産性)、4) Sense of freedom (自由度)、5) Desire to win (勝利への欲求)、6) Family influence (家族の影響)、7)

Perception of sport (スポーツの見方)、8) Fear of judgement (判断への不安) の8因子を「態度」と定義した。

第2章 先行研究

第1節 Youth Insight Pack における研究

Youth Insight Pack³³⁾ は、Sport England がこれまでイギリスで行われてきたスポーツに対する若者の態度や行動に関する研究をまとめた報告書である。

図1は、イギリスの若者14歳から25歳におけるスポーツに対する態度と行動を人口数値と共に表したものである。Sport England は、スポーツへの態度が、ポジティブ、機能的および興味なしの3パターンの中でも運動頻度が「中・低度」である人々に焦点を当て、それぞれの特徴や生活等を加味したアプローチ方法を提供した。

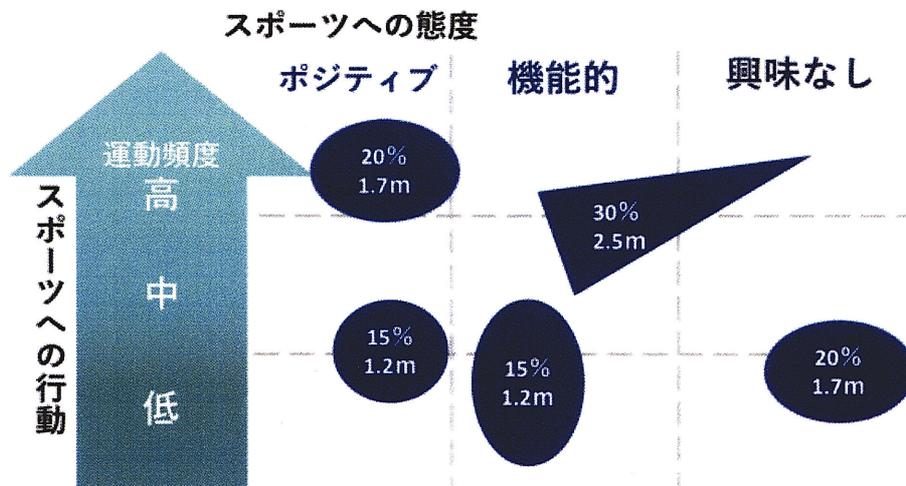


図1. イギリスにおける若者のスポーツに対する態度と行動

出所) Sport England(2014). p.19 より引用

それだけでなく、図2のように、すべての若者の心に響くメッセージや経験をまとめた。

若者は、育っている環境がこれまでの世代と全く異なり、テクノロジーと切っても切れない関係にある。そのため若者は、イベント等の社交の場において時間や経験を誰かとシェア（共有）することや、自分の価値にあった経験を大事にしている。そしてそれは、楽しいだけでなく、目的がある経験であることが大事となる。また、スポーツに対しネガティブな印象を持っている若者は、「スポーツ」という言葉から、伝統的かつ競争的なスポーツをイメージし、拒否反応を示す者もいることが明らかとなった。

若者に影響を与えるメッセンジャーは、兄弟や同性の仲間、教師、年が近い先輩の中でも「私のような人」であることが重要である。また、仲間の前で恥ずかしくないことも重要となる。

スポーツに対する態度は複雑である。若者はスポーツを好きでも嫌いでもない。日々の行動は一定でなく、常に変化している。そのため、態度と行動を一致させる必要はなく、行動を変えることに着目する必要がある。

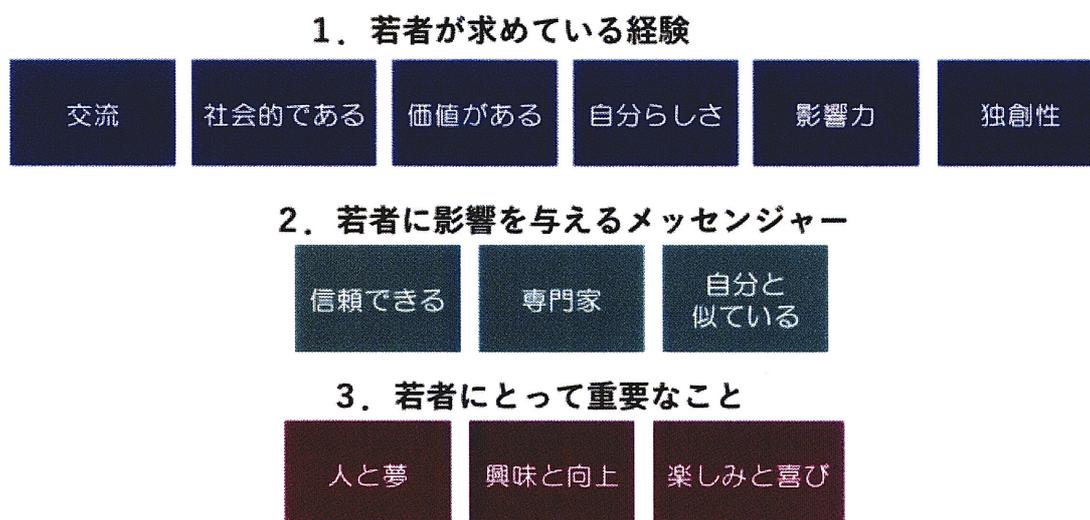


図 2. イギリスにおける若者全てに当てはまる経験やメッセージ
出所) Sport England(2014). p.25 より引用

第2節 Under the skin における研究

Under the skin³⁴⁾ は、Youth Insight Pack を基に、さらに若者を理解するために行われた研究である。Youth Insight Pack では、若者全体にアプローチするための研究が行われたが、Under the skin では、若者を異なるパーソナリティのタイプに分けてアプローチをする研究が行われた。その結果、6つのタイプのパーソナリティに分けられた。この6つのタイプのパーソナリティは、生活のモチベーションや態度を基に作られているが、スポーツや基本的な人口統計（年齢、ジェンダーおよび教育）の影響も含まれている。そして、それぞれのグループの特性、規模、スポーツとの関わり方を考慮し、グループ毎にスポーツ参加、継続を促すための最適なアプローチ方法を明らかにした。

また、Under the skin では、Youth Insight Pack での「スポーツに対して感情的 (emotionally) と理性的 (rationally) な態度がある」という結果から、スポーツへの態度を理解するため、感情的関与スコア (Emotional engagement with sport) と理性的関与スコア (Rational engagement with sport) の2つに分けて理解している。この2つのスコアは最小値を0から最大値を100で作られており、スコアの数値が高いほど、運動・スポーツとの関係性が強く、好意的であることを示している。

第3節 Go Where Women Are における研究

Go Where Women Are³⁵⁾ は、Sport England のこれまでの研究を基に、女性に特化した報告書である。より女性がアクティブになるために、モチベーションやバリアを明らかにした。

第1項 モチベーション

Women in Sport⁴⁸⁾ の調査により、女性が日々の時間をどのように使うかを決定し、何を優先させるかを定める6つの価値が明らかにされた。これらの価値はライフステージや日々の経験によっても急速に変化し、女性の間でもどの価値を大事にしているかは異なる。

以下に6つの価値である1) 見た目が良いこと (looking good)、2) 良い気分であること (feeling good)、3) 目標達成 (achieving goals)、4) スキルの獲得 (developing skills)、5) 友達や家族と過ごすこと (nurturing friends and family)、6) 楽しいこと (having fun) について示す。

1. 見た目が良いこと (looking good)

見た目が良いことは、多くの女性が共感する価値であり、人生においての様々な局面でも重要視されている。見た目が良いことには、痩せていること、引き締まっていること、髪や爪をきれいにしていることなども含まれる。結婚式や休日、パーティのようなイベントに近づいている時に、この価値の重要性は増していく。

2. 良い気分であること (feeling good)

良い気分であることは、女性にとって重要な要素である。女性は、長期的に健康であるために、心、体および精神を整えることが重要であると考えている。女性は、身体的にだ

けでなく、感情的・精神的な幸福に費やすことで増加する。女性がストレスフルな生活を避けようとするにつれ、健康に良い経験や「自分の時間」はますます重要視されていく。

3. 目標達成 (achieving goals)

目標達成に向け、生活の中でも成長していると感じることが女性は好きである。女性たちは仕事に対してだけでなく、個人的にも生活の中で何か達成するような目標を持っており、達成することで大きな満足感を感じている。

4. スキルの獲得 (developing skills)

スキルの獲得は、人として成長するためにも生活においても重要な要素である。女性は新しいことを学んだり、人として成長したり、視野を広げたいと感じている。新しい何かを習得する、知識が増加する、何かを作り出すことで幸福感を得ている。リーダーシップや個人的なスキル、コーチングのようなソフトスキルを獲得することにも興味がある。

5. 友達や家族と過ごすこと (nurturing friends and family)

友達や家族と過ごすことを女性は重要視している。女性は、家族や友人、子供、パートナーと時間を使うことに価値を置き、相手のニーズを直感的に優先する。特に子供がいる場合、妻や母親は家族の成長に時間を費やす。そして、女性はしばしば家族の要としての役割を果たす。

6. 楽しいこと (having fun)

楽しいことは、女性の生活において基本的であり重要な要素である。友達との交流や笑いは生活において必要不可欠なものである。楽しいこととは、やらなければいけないことではなくしたいことをすることである。しかしながら一人で時間を使うことでも、この価値を感じることはできる。日々の苦勞から解放する必要不可欠なものでもある。

第2項 女性のバリア

Women's Sport and Fitness Foundation⁴⁹⁾ は、女性や少女がスポーツに参加するためのバリアを明らかにした。女性には、数多くのバリアが存在しており、Women's Sport and Fitness Foundation は、1) 現実的なバリア (Practical barriers)、2) 個人的なバリア

(Personal barriers)、3) 社会的・文化的なバリア (Social and cultural barriers) の3つのカテゴリーに分けて考えた。運動・スポーツと女性の関係は、個人的、社会的および環境的な要因を基にし、とても複雑である。

1) 現実的なバリア (Practical barriers) は大きく分けて時間の欠如、お金の欠如、交通手段の不足、個人の安全 (Personal safety)、資金、施設までのアクセスなどが存在する。また、より多くのライフステージでの変化の経験を持つ人は、スポーツの参加頻度が低い傾向にあることも明らかにされている⁷⁾³²⁾。

2) 個人的なバリア (Personal barriers) はボディイメージ、衣類や道具、自信の欠如、両親や大人の影響が存在する。

3) 社会的・文化的なバリア (Social and cultural barriers) はスポーツの男性社会的な文化、性別、障害、民族性についての態度や偏見、セクシャルハラスメントや虐待、メディアの表現での女性軽視やスポーツのロールモデルの欠如などが存在する。女性は、運動・スポーツを促進するために使われてきた完璧なモデルと自身を結び付けて考えていない²⁹⁾。そのため、ロールモデルは、完璧なモデルよりむしろ、体型や運動頻度が同じようなレベルにある「私のような人」であることが必要である³⁾。

Sport England は、このバリアを図3のように判断への不安 (Fear of being judged) とまとめた。判断への不安とは、女性がスポーツをする際に、阻害となる要因を表したものである。女性は運動・スポーツをする可能性の障壁になる様々なバリアを引用し、スポーツをしない傾向がある。

判断への不安では、バリアを現実的・物理的な課題 (Practical/ logistical challenges) と個人的・感情的な理由 (Personal/ emotional reasons) の2つに分けて作られた。

現実的・物理的な課題は、行動をしないための正当と認められる言い訳としてよく使用されるものであり、個人的・感情的な理由は、自身の中に本音として内在しているが、明白に述べることができないものも含まれる。

この2つのバリアは関連しており、分離できないものである。それゆえに、現実的・物理的な課題と個人的・感情的な理由の両方のバリアを取り除く必要がある。

また、Lisa O'Keefe¹⁵⁾ は、判断への不安の具体例を、図4のようにまとめ挙げ、This Girl Can に用いた。

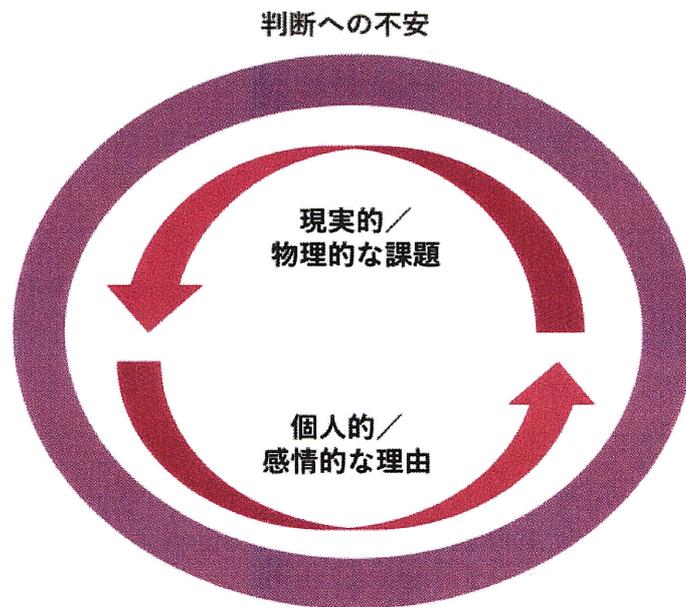


図 3. 判断への不安

出所) Sport England(2015). p.22 より引用

判断に対する障壁

外見 Appearance	能力 Ability	優先順位 Priorities
<ul style="list-style-type: none"> ・汗だくになる ・顔が赤らむ ・普段の行いとは違う（作り物） ・他人の前で着替える ・タイトな服を着る ・運動着を着る ・間違った洋服/ニットを着る ・自身の身体を見せる ・運動中の自分の身体はどのように見えるのか（揺れ） ・女性らしく見えない ・筋肉がつきすぎる 	<ul style="list-style-type: none"> ・十分に元気でない ・十分に上手くない ・本気さ/競争心が十分でない ・ルールを知らない ・持参すべき用具が何かわからない ・間違った用具を持参する ・グループに留まる ・上手すぎでしまう ・本気/競争心がありすぎると見られてしまう 	<ul style="list-style-type: none"> ・家族と過ごす時間の方が重要であるべき時に運動に時間を費やす ・友達との時間がより重要であるべき時に運動に時間を費やす ・勉強/仕事の方が重要であるべき時に運動に時間を費やす ・その他取り組むべきもっと重要なことがある時に運動に時間を費やす

図 4. 判断への不安の具体例

出所) Lisa O'Keefe (2016) より引用

第3項 行動変容ステージモデル

行動変容ステージモデル (Transtheoretical Model) とは、Prochaska と DiClemente²⁵⁾によって開発されたモデルである。対象となる個々人の「身体活動習慣を変えよう」とい

う動機付けがどの程度あるか、行動変容を妨げる障害となっているのは何か、行動変容を促進するためにはどんな具体的な方略やテクニックがあるか、などを調べる枠組みとなるものである¹⁶⁾。

行動変容は5つのステージから構成されており、全く興味を示さない「無関心期」、行動をしてはいないが興味を持ち始める「関心期」、行動を変容する準備をしている「準備期」、行動を起こし始めた「実行期」、行動を6ヶ月以上にわたり継続している「維持期」の5つが存在する。

また、社会的認知理論⁴⁾などの多様な心理学の理論を統合したモデルであり、行動変容のステージ、行動変容のプロセス、意思決定のバランス、およびセルフ・エフィカシーという4つの要素から構成される^{3) 16) 25)}。セルフ・エフィカシーとは、ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信の程度のことである⁴⁾。

第4項 行動変容ステージ、モチベーションおよびバリアの関係性

Sport England は、行動変容ステージモデル、モチベーションおよびバリアを統合し、図5のように考えた。

行動変容ステージが上がるにつれ、モチベーションはネガティブからポジティブへ変化し、主に現実的・物理的な課題であるバリアは行動のパターンができ上がれば減る傾向にある。しかし、個人的・感情的な理由に内在する「不安」は、習慣的に運動をしている女性の中にも残り続ける。

運動行動を継続させていくためには、モチベーションの強さがバリアに勝らなければならない。その方法として、以下の3点が示されていた。1) バリアを取り除く。しかし、行動を起こすために必要不可欠ではない。2) ポジティブなモチベーションを持たせる。3) ある瞬間に漠然とした意思から計画性のある行動への進展を促すための引き金を与える。

また、身体活動をするかしないかは、女性や少女の場合、その時々での身体的状況や感情的状況によって決まる。ライフステージや状況にかかわらず、女性をサポートしていく必要がある。行動変容の段階と、女性が直面しているバリアを理解すると同時に、段階に前進するための動機が何かを理解することが重要である²³⁾。



図 5. 行動変容ステージ、モチベーションおよびバリアの関係性
出所) Sport England(2015). p.28 より引用

第4節 先行研究のまとめ

先行研究を検討した結果、以下の4点が明らかとなった。

1. 女性が運動・スポーツを行っていく上で生じるバリアを取り除くのと同時に、それぞれに適した環境やモチベーションが必要である。
2. 若者や女性をひとまとめにして語るのではなく、それぞれに適したアプローチ方法を提供する必要がある。
3. Under the skin における研究方法が明らかとなっていない。
4. イギリスで行われた研究であるため、日本において適しているのか検証する必要がある。

第5節 リサーチクエスションの設定

本研究の目的は、日本における女子高校生の運動・スポーツ参加促進のための調査項目の検討を行うことであった。そのため、「Sport England で用いられた調査方法や分析方法は、日本で応用が可能であるのか」というリサーチクエスションを設定した。

第3章 研究方法

本研究では、日本における女子高校生の運動・スポーツ参加促進のための調査項目の検討を行うため、まず、調査1) Sport England で行われた調査内容を再分析し、次に調査2) 日本で応用するため、調査項目の検討を行うことである。

第1節 調査1

本研究では、調査1として、Sport England で行われた調査内容の再分析を行った。

第1項 調査方法

1. 調査対象者

調査1では、Sport England で用いられた男性1108名、女性879名、計1987名のデータを用いた。また、対象者の年齢は、14歳から25歳、平均19.84(±3.25)歳であった。

2. 質問紙調査

本調査は、Sport England によって行われたインターネット調査である。

3. 質問内容

本調査では、潜在クラス分析において用いられた質問項目のみを再分析に使用した。

1) 個人的属性

個人的属性の項目は1) 年齢、2) 性別、3) 現在、教育を受けているかの3項目であった。

現在、教育を受けているかどうかについては、「Yes/ No」で処理されている項目を用いた。

2) スポーツへの関与に関する項目

スポーツへの関与に関する項目は、Sport England の調査で用いられた7項目を設定した。表1の7変数から感情的関与スコアと理性的関与スコアを算出するモデルが立てられた。

質問項目 B1b を除き、5段階尺度のリッカートスケール法「Strong agree= 1、Slightly agree= 2、Neither agree nor disagree= 3、Slightly disagree= 4、Strong disagree= 5」で回答を求めた。

質問項目 B1b については、「every day= 1、most days in a week= 2、2-3 times a week= 3、Once a week= 4、2-3 times a month= 5、Once a month= 6、Once every 2-3 months= 7、Once every 4-5 months= 8、Once every 6 months= 9、Less than once every 6 months=10、Never=11」の 11 のカテゴリーに分けられていた。

表 1. スポーツへの関与に関する変数

質問項目	内容
A1-1	スポーツは私の一部である
A1-2	友達とスポーツについてたくさん話をする
A1-6	ほとんどのスポーツが得意だ
B1b	あなたは呼吸が上がる程度の運動を30分以上行う日がどのくらいありますか
A1-8	スポーツや運動はストレスを解消するのによい方法である
A1-10	私は健康とフィットネスを意識している
A1-7	しばらくの間運動をしないと罪悪感を感じる

3) 態度に関する因子

本研究では、態度に関する因子について、Sport England によって設定された 8 因子 24 項目を用いた。態度に関する因子として、1) Self-confidence (4 項目)、2) Self-contentment (2 項目)、3) Being productive (3 項目)、4) Sense of freedom (2 項目)、5) Desire to win (2 項目)、6) Family influence (2 項目)、7) Perception of sport (5 項目)、8) Fear of judgement (4 項目) の 8 因子を使用した。5段階尺度のリッカートスケール法「Strong agree= 1、Slightly agree= 2、Neither agree nor disagree= 3、Slightly disagree= 4、Strong disagree= 5」で表されていた。

8 因子それぞれについて、以下に具体的な内容を述べる。

1) Self-confidence (自信)

自信は、「自分のために何か行動を起こすことができる」、「私は自信家である」、「私は楽観主義である」、「私が行うこと(スポーツなど)を通じて新しい人に出会うことや

新しい友達が出来るとは喜ばしいことだ」の4項目である。スコアが低いほど自信が高いことを表している。

2) Self-contentment (自己満足)

自己満足は、「自分の身体に満足している」、「自分自身に満足している」の2項目であり、スコアが低いほど自己満足度が高いことを表している。

3) Being productive (生産性)

生産性は、「私は常日頃行なっている日課がある」、「自由な時間を長く持ちたい」、「私は怠け者である(逆転項目)」の3項目である。スコアが低いほど時間を有効活用し、生産的に活動していることを表している。

4) Sense of freedom (自由度)

自由度は「私には選択の自由がたくさんある」、「私は友人の意見をよく受け入れる(寛容である)」の2項目である。スコアが低いほど自由度が高いことを表している。

5) Desire to win (勝利への欲求)

勝利への欲求は「競争心が強い、または負けず嫌いである」、「勝つことは私にとって最も重要なことである」の2項目である。スコアが低いほど勝利への欲求が高いことを表している。

6) Family influence (家族の影響)

家族の影響は、「家族は運動やスポーツをすることを私に勧めはしない(逆転項目)」、「私は家族と仲が良い」の2項目である。スコアが低いほど家族から受ける影響が高いことを表している。

7) Perception of sport (スポーツの見方)

スポーツの見方は、スポーツに対するポジティブな気持ちが自身の中にどのくらいあるのかを表している。「スポーツや運動で達成したことをシェアするために SNS を使いたい」、「自分自身が気持ちよくプレーできるようなスポーツに参加したい」、「スポーツをし

ている同年代の人をカッコいいと思う」、「運動はまさに私のための時間である」、「スポーツをすることでより人気者になれる」の5項目を設定した。スコアが低いほどスポーツの見方がポジティブであることを表している。

8) Fear of judgement (判断への不安)

判断への不安は、スポーツをする際に、阻害となる要因を表したものである。「得意でないことに取り組むことが嫌いだ」、「みんなが同じようなレベルにあるスポーツをしたい」、「運動をしている姿を人に見られることを恥ずかしく感じる」、「スポーツや運動をしている時、バカにされていないか心配だ」の4項目を設定した。スコアが低いほど判断への不安が高く、スポーツを行う際に障害が多いということを表している。

4) 人生のモチベーションに関する項目

人生のモチベーションに関する項目は7項目を用い、「Yes/ No」で聞かれていた。

第2項 分析方法

本研究の統計分析には IBM SPSS Statistics Version 24 および Amos Graphics 24 を用い、潜在クラスモデルには Latent-GOLD 5.1.0 を用いた。

1. 記述統計および尺度の信頼性

調査1においては、まず、対象者の個人的属性における、1) 年齢、2) 性別、3) 現在教育を受けているかの3項目について単純集計を行った。

スポーツへの関与に関する項目は、探索的因子分析により因子構造を探索したのち、確認的因子分析 (Structural Equation Modeling 以下、SEM) を行った。また、内的整合性を確かめるため、信頼性係数 (α 係数) を算出した。

態度に関する因子は8因子における全体の平均値、標準偏差を算出した。その後、信頼性係数 (α 係数) と SEM の算出を行った。

2. スポーツへの関与スコアの算出

スポーツへの関与に関する項目を用い、スポーツへの関与スコアの得点の算出を行った。それぞれのスコアの最小が0、最大が100となるようにスケーリングした。

3. 潜在クラスモデルによるクラスタリング

2. 「スポーツへの関与スコアの算出」の結果得られた得点と、その他の変数を用いて潜在クラス分析を行った。潜在クラス分析に用いられた質問項目は表2の通りである。

表 2. 潜在クラス分析に用いた変数

態度因子	項目内容
Self-confidence	I am able make things happen for myself. I am optimistic. I am a confident person. I enjoy meeting new people and making new friends through the things I do.
Self-contentment	I'm happy with my body. I am comfortable with who I am.
Being productive	I have a strong routine. I like to use my free time productively. I am lazy.
Sense of freedom	I have a lot of freedom to make my own choices. I am open to things that my friends suggest to me.
Desire to win	I am competitive. Winning is the most important thing to me.
Family influence	My family have never encouraged me to take part in sport/exercise. I am close to my family.
Perception of sport	I like to use social media to share my sporting/fitness achievements. Taking part in sport makes me feel good about myself. I think that people my age who play sport are cool. Exercise is my me time. Playing sport makes me more popular.
Fear of judgement	I hate doing things that I might not be good at. I only want to play sports where everyone is at a similar level. I am embarrassed about how I look when I exercise. I worry about looking like a fool when I play sport/exercise.
人生のモチベーション	Achieveing goals Being successful Competing Developing myself as a person Doing something worthwhile Improving appearance Staying healthy
その他	性別 年齢 教育を受けているか (yes/no) スポーツへの関与スコア (感情的関与、理性的関与)

第2節 調査2

本研究では、調査2として、日本で応用するため、調査項目の検討を行った。

第1項 調査方法

1. 調査対象者

調査2では、調査対象をT県の高校1年生、男子139名、女子181名、計320名とし、男子128名、女子166名、計294名から回答が得られた。回答率は全体で92%だった。また、対象者の年齢は15歳から16歳、平均15.19(±0.39)歳であった。

2. 調査期間

本調査の調査期間は、2017年6月であった。

3. 質問紙調査

本調査は郵送法による質問紙調査を実施した。本調査の質問紙は「添付資料：質問紙」に示した。質問紙は学校の教諭に一括して配布され、その場で記述したのち、回収された。

4. 質問内容

Sport Englandによって用いられた質問項目は有識者のチェックの基、日本語で作成した。その後、英語に再翻訳し、日本語と英語に精通した学識経験者のチェックを経た。

1) 個人的属性

個人的属性の項目は1)年齢、2)性別、3)部活動入部状況の3項目であった。

2) 運動・スポーツ活動に関する項目

運動・スポーツ活動に関する項目は、笹川スポーツ財団²⁸⁾²⁹⁾、スポーツ庁⁴¹⁾⁴²⁾、ベネッセ⁵⁾⁶⁾を参考に設定した。「運動・スポーツをすることが好きか」、「運動・スポーツを観ることが好きか」、「体育授業は好きか」の3項目を尋ねた。

Sport Englandに合わせ、5段階尺度のリッカートスケール法「あてはまる=1、ややあてはまる=2、どちらともいえない=3、ややあてはまらない=4、あてはまらない=5」で評価した。

3) 生活環境に関する項目

生活環境に関する項目では、笹川スポーツ財団²⁹⁾を参考に、主な交通手段、通学の所要時間を尋ねた。主な交通手段は複数選択可とし、徒歩に関しては「徒歩のみ」という設定を行った。

4) スポーツへの関与に関する項目

スポーツへの関与に関する項目については、調査1と同様の7項目を設定した。

5) 態度に関する因子

態度に関する因子については、調査1と同様の8因子24項目を設定した。

6) 人生のモチベーションに関する項目

人生のモチベーションに関する項目については、調査1と同様の7項目と、Sport Englandの調査で用いられた6項目を加えて設定した。

第2項 倫理的配慮

本研究は順天堂大学スポーツ健康科学研究科研究用倫理審査会により承認を得たものである（順大院ス倫第29-90号）。

本調査を実施するにあたり、回答者が特定されないよう統計的に処理することや、個人が特定される、または回答内容が外部に漏れることがないように、個人情報管理を徹底することを説明した。

第3項 分析方法

本研究の統計分析にはIBM SPSS Statistics Version 24およびAmos Graphics 24を用い、潜在クラスモデルにはLatent-GOLD 5.1.0を用いた。

1. 記述統計および尺度の信頼性

調査2においては、まず、対象者の個人的属性における年齢、部活動入部状況、生活環境に関する項目について単純集計を行った。

スポーツへの関与に関する項目は、探索的因子分析により因子構造を探索したのち、

SEMを行った。

態度に関する因子は8因子における全体の平均値および標準偏差を算出した。その後、SEMと信頼性係数（ α 係数）の算出を行った。

2. スポーツへの関与スコアの算出

スポーツへの関与に関する項目を用い、スポーツへの関与スコアの得点の算出を行った。それぞれのスコアの最小が0、最大が100となるようにスケーリングした。

3. 各因子・項目における男女間の比較

男女間の比較をするため、態度に関する8因子と「運動・スポーツをすることが好きか」、「運動・スポーツを観ることが好きか」、「体育授業は好きか」の3項目においてt検定を行った。また、男女のモチベーション比較を行うため、 χ^2 検定を行った。

4. 潜在クラスモデルによるクラスタリング

2.「スポーツへの関与スコアの算出」の結果得られた得点と、その他の変数を用いて潜在クラス分析を行った。分析に使用した質問項目は表2と同様の項目を用いた。しかし、今回の対象者は、T県の高校1年生に絞ったため、年齢、教育を受けているかの2項目を除いた質問項目を用いて潜在クラス分析を行うこととした。

5. 各クラスターの特徴

潜在クラス分析によって分かれたクラスター間の比較をするため、クロス集計表、記述統計表を用いて各クラスターの特徴を求めた。その後、態度に関する8因子においてMANOVAを行った。「運動・スポーツをすることが好きか」、「運動・スポーツを観ることが好きか」、「体育授業は好きか」の3項目においてはANOVAを行った。また、クラスター間のモチベーション比較をするため、 χ^2 検定を行った。

6. 各クラスターにおける男女の差の検討

女性の特徴を調べるため、各クラスター間の男女差に関する χ^2 検定を行った。

第4章 結果

第1節 調査1 (Sport England の調査)

第1項 対象者の個人的属性

調査1 (Sport England の調査) における対象者の年齢、現在の教育の有無について示した。

1. 対象者の年齢

調査1における対象者の年齢の最小値、最大値、平均値および標準偏差を表3に示した。

表 3. 調査1の対象者の年齢の最大値、最小値、平均値、標準偏差

	n	最大値	最小値	平均値	SD
男性	1108	25	14	19.81	3.15
女性	879	25	14	19.88	3.36
全体	1987	25	14	19.84	3.25

また、年齢別における人数を図6に示した。

全体では18歳が最も多く、男性は18歳、女性は21歳が最も多かった。

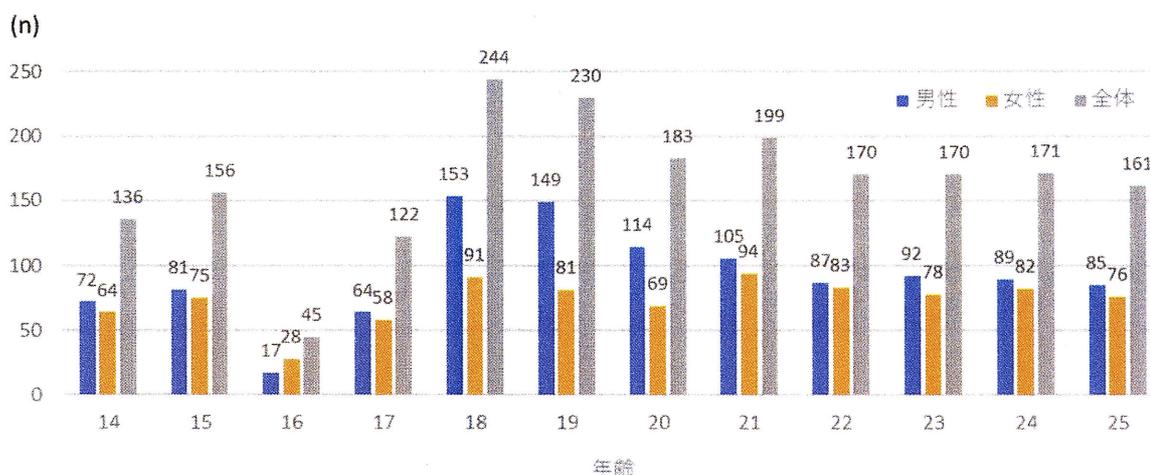


図 6. 調査1の対象者の年齢

2. 現在の教育の有無

対象者の現在、教育を受けているかについては、表4の通りであった。

表 4. 調査 1 における対象者の現在、教育を受けているか

教育の有無	n	%
受けている	1177	40.8
受けていない	810	59.2
合計	1987	100

第 2 項 各尺度の構成概念妥当性の検討

1. スポーツへの関与に関する項目

表 5 は、スポーツへの関与に関する 7 項目を用いて、探索的因子分析により因子構造を探索したものである。パラメータの推定には最尤法を用い、固有値が 1 を超えた因子のみを抽出した。そして、プロマックス法による因子の斜交回転を行ったところ、表 5 のような因子行列を得た。第 2 因子までの累積寄与率は 0.507 であった。

以上の結果より、第 1 因子には質問項目 A1-1、A1-2、A1-6、B1b が、第 2 因子には質問項目 B1b、A1-8、A1-10、A1-7 が関わっていると考えられるため、SEM を用いた。

表 5. 調査 1 のスポーツへの関与に関する 7 項目における探索的因子分析の結果

質問項目	内容	第 1 因子	第 2 因子
A1-1	スポーツは私の一部である	0.87	0.05
A1-2	友達とスポーツについてたくさん話をする	0.81	-0.06
A1-6	ほとんどのスポーツが得意だ	0.74	-0.03
B1b	あなたは呼吸が上がる程度の運動を 30 分以上行う日がどのくらいありますか	0.30	0.36
A1-8	スポーツや運動はストレスを解消するのによい方法である	0.14	0.53
A1-10	私は健康とフィットネスを意識している	-0.09	0.69
A1-7	しばらくの間運動をしないと罪悪感を感じる	-0.05	0.71

n=1987

図 7 のように SEM を行った結果、5%水準ですべて有意である標準化推定値が得られた。適合度指標は、P 値=.00、GFI=.988、AGFI=.973、CFI=.985、RMSEA=.053 であった。P 値は、サンプルサイズがかなり大きいいため、ある程度は仕方がないことが考えられる。また、RMSEA の値は、採択の基準に満たなかったが、グレーゾーンと言われる 0.05~0.1 の間にあるため、概ね構成概念妥当性が示されたと判断した。

内的妥当性を示す信頼性係数 (α 係数) は、第 1 因子が $\alpha = .75$ 、第 2 因子が $\alpha = .61$ で

あった。

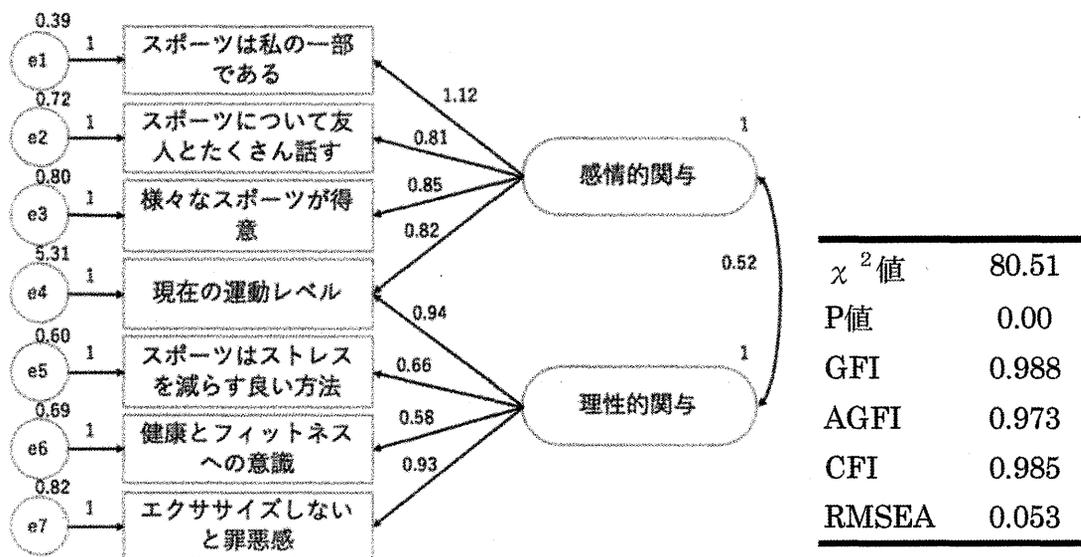


図 7. 調査 1 のスポーツへの関与に関する項目における SEM の結果

2. 態度に関する因子

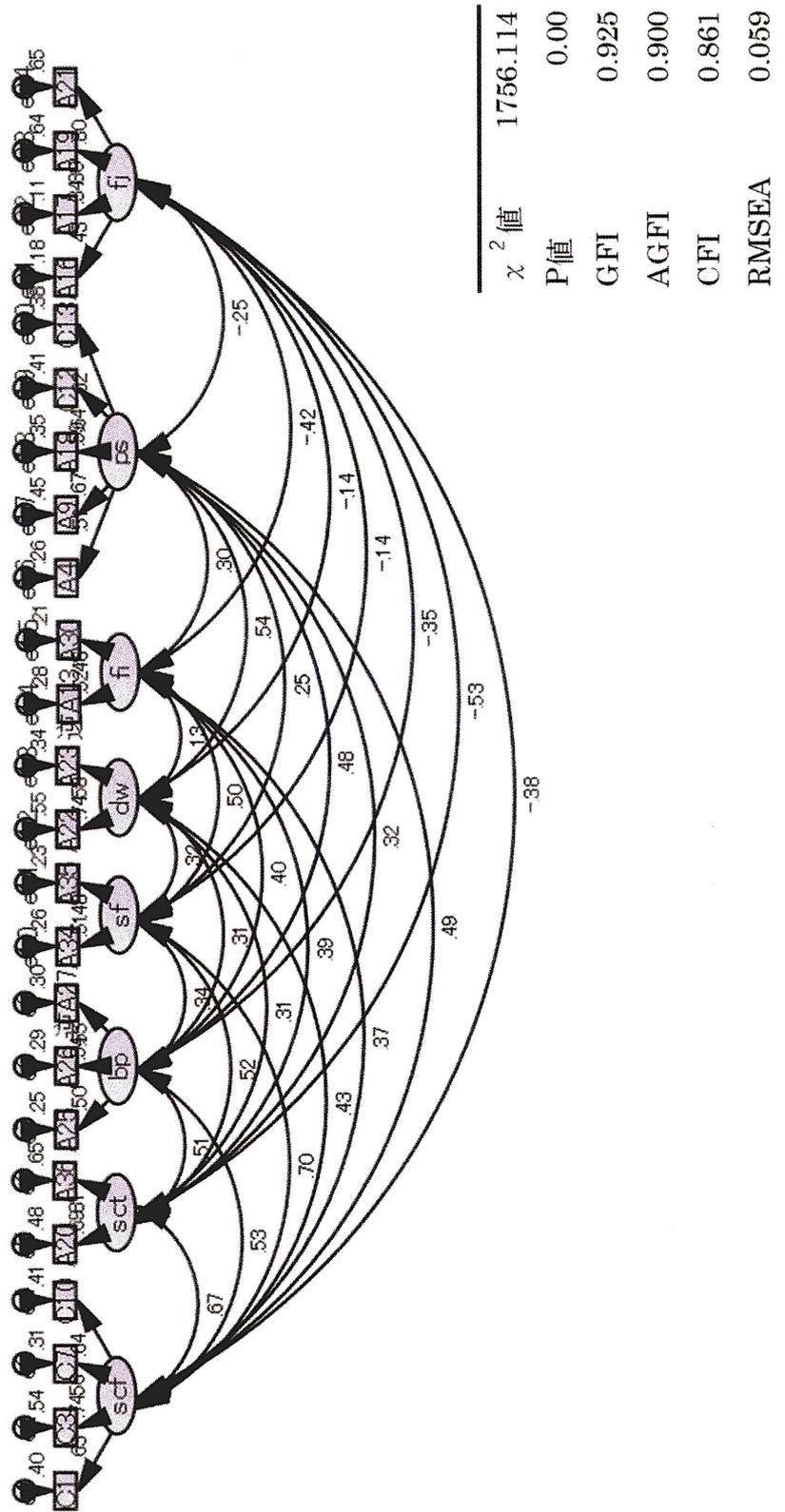
表 6 に Sport England が用いた 8 因子について、対象者全体における項目の平均値、標準偏差および信頼性係数 (α 係数) を示した。内的妥当性を示す信頼性係数 (α 係数) は、Self-confidence、Perception of sport の 2 因子が .70 を超えた結果となった。

また、図 8 のように SEM を行った結果、0.1%水準で全て有意である標準化推定値が得られた。適合度指標は、P 値=.00、GFI=.925、AGFI=.900、CFI=.861、RMSEA=.059 と概ね良好な値を示した。

表 6. 調査 1 の態度に関する 8 因子における平均値、標準偏差、信頼性係数

態度因子	項目内容	Mean	SD	α
Self-confidence		2.44	0.76	0.74
	I am able make things happen for myself.	2.26	0.89	
	I am optimistic.	2.50	1.03	
	I am a confident person.	2.70	1.15	
	I enjoy meeting new people and making new friends through the things I do.	2.31	1.00	
Self-contentment		2.58	1.05	
	I'm happy with my body.	2.92	1.27	
	I am comfortable with who I am.	2.24	1.12	
Being productive		2.75	0.84	0.53
	I have a strong routine.	2.75	1.19	
	I like to use my free time productively.	2.33	1.04	
	I am lazy.	3.16	1.25	
Sense of freedom		1.96	0.67	
	I have a lot of freedom to make my own choices.	1.89	0.92	
	I am open to things that my friends suggest to me.	2.03	0.77	
Desire to win		2.67	0.96	
	I am competitive.	2.17	1.06	
	Winning is the most important thing to me.	3.16	1.20	
Family influence		2.19	0.91	
	My family have never encouraged me to take part in sport/exercise.	2.55	1.29	
	I am close to my .	1.83	1.03	
Perception of sport		3.03	0.82	0.74
	I like to use social media to share my sporting/fitness achievements.	3.72	1.28	
	Taking part in sport makes me feel good about myself.	2.31	1.14	
	I think that people my age who play sport are cool.	2.66	1.03	
	Exercise is my me time.	3.10	1.25	
	Playing sport makes me more popular.	3.35	1.14	
Fear of judgement		2.76	0.89	0.69
	I hate doing things that I might not be good at.	2.58	1.11	
	I only want to play sports where everyone is at a similar level.	2.72	1.11	
	I am embarrassed about how I look when I exercise.	2.92	1.35	
	I worry about looking like a fool when I play sport/exercise.	2.82	1.35	

n=1987



χ^2 値	1756.114
P 値	0.00
GFI	0.925
AGFI	0.900
CFI	0.861
RMSEA	0.059

図 8. 調査 1 の態度に関する 8 因子における SEM の結果

第3項 スポーツへの関与スコアの算出

第2項の1) スポーツへの関与に関する項目の分析結果を用い、各個人の「感情的関与」および「理性的関与」のスコアを計算した。計算には Amos のテキスト出力、「推定値>行列」のなかの「因子得点ウェイト」を用いて、以下の式によりスコアを計算した。

$$\text{感情的関与スコア} = - (0.444 \times A1-1 + 0.138 \times A1-2 + 0.126 \times A1-6 + 0.024 \times B1b \\ + 0.024 \times A1-8 + 0.021 \times A1-10 + 0.020 \times A1-7)$$

$$\text{理性的関与スコア} = - (0.086 \times A1-1 + 0.027 \times A1-2 + 0.024 \times A1-6 + 0.059 \times B1b \\ + 0.295 \times A1-8 + 0.258 \times A1-10 + 0.246 \times A1-7)$$

上記の2つの数式の全体にマイナスをつけたのは、感情的関与・理性的関与のスコアが高いほどそれぞれの項目において「あてはまる」を選択する傾向が高くなってほしいのに対し、アンケートの各項目がすべて「Strong agree = 1、Slightly agree = 2、Neither agree nor disagree = 3、Slightly disagree = 4、Strong disagree = 5」という逆転項目状態になっているためである。上記のスコアをさらに、最低点が0、最高点が100となるようにスケールリングしたものを使用した。

スコアを算出したのち、SPSS 上に残された Sport England がスポーツへの関与スコアとして用いられたとみられるスコアと、今回算出したスコアが一致しているかを確認するため、相関分析を行った。その結果、感情的関与スコアが.998、理性的関与スコアが.992と高い相関を表した。よって、スポーツへの関与スコアにおいて、Sport England と同様の分析を行うことができることを確認した。

第4項 潜在クラスモデルによるクラスターリング

Sport England で用いた変数は表2のように記述されている。しかし、分析の詳細は記されていないため、以下のように再分析を行った。

態度に関する因子については、8因子 24項目のうちの逆転項目2項目を反転させた上で、各因子に挙げられている変数の値を合計して算出した。例えば、「Self-confidence」の因子については、最低で4点、最高で20点となるようにした。

感情的関与スコア、理性的関与スコアの得点については、第3項の「スポーツへの関与スコアの算出」で算出したものを使用した。

クラスター数を2から13まで動かしてそれぞれ潜在クラス分析を行い、情報量規準(BIC)の値を比較したところ、表7のようになった。

BICは数値が小さいモデルほど優れている。そのため、BICの観点からはクラスター数10が最良であった。しかし、Sport Englandではクラスター数6を採用している。BICは他の情報量基準よりもクラスター数の小さいモデルを採用しやすい。このことから、クラスター数6を選択した合理的な理由は存在しないものと思われる。

表 7. 調査1のBICの値

クラスター数	2	3	4	5	6	7
BIC	131529.6	130327.6	129596.5	129272.8	129047.2	128455.9
クラスター数	8	9	10	11	12	13
BIC	128251.9	128437.6	127038.4	127771.8	128258.2	128327.8

第5項 潜在クラス分析の結果

第3項の潜在クラスモデルによるクラスタリングによって分けられた6つのクラスターの特徴を算出した。

表8は各クラスターの性差・年齢差・運動頻度、表9はスポーツへの関与スコアの平均値、標準偏差を表した。運動頻度の分類は、Sport Englandに則り、「every day=1、most days in a week=2」を運動頻度高、「2-3 times a week=3、Once a week=4」を運動頻度中、「2-3 times a month=5、Once a month=6、Once every 2-3 months=7」を運動頻度低、「Once every 4-5 months=8、Once every 6 months=9、Less than once every 6 months=10、Never=11」を運動頻度無しとした。

これらの表から各クラスターの特徴をSport Englandによる報告書(Under the skin)と比較をした結果、表8のクラスター別に見た性差・年齢差・運動頻度においてはほぼ一致する結果となった。しかし、表9のクラスター別に見たスポーツへの関与スコアにおいては、第3項のスポーツへの関与スコアの算出において同様の分析ができたことを確認したが、スコアが異なる結果となった。そのため、報告書として使用する際に、再び何らかの統計が行われたのではないかということが示唆された。

表 8. 調査 1 におけるクラスター別に見た性差・年齢差・運動頻度 (%)

クラスター		1	2	3	4	5	6
		(n=523)	(n=438)	(n=382)	(n=203)	(n=238)	(n=203)
グループサイズ		26.3	22.0	19.2	10.2	12.0	10.2
性別	男子	48.2	44.3	76.4	25.6	61.8	84.2
	女子	51.8	55.7	23.6	74.4	38.2	15.8
年齢	14～17歳	22.8	15.5	34.8	21.2	24.8	18.2
	18～21歳	38.0	51.8	36.4	38.4	46.2	50.7
	22～25歳	39.2	32.6	28.8	40.4	29.0	31.0
運動頻度	高	14.7	22.8	48.4	4.4	10.9	55.2
	中	49.7	52.7	45.8	26.1	34.0	43.3
	低	26.8	19.9	5.2	23.6	32.8	1.5
	無	8.8	4.6	0.5	45.8	22.3	0.0

表 9. 調査 1 におけるクラスター別に見たスポーツへの関与スコアの平均値、標準偏差

クラスター		1	2	3	4	5	6
理性的関与スコア	M	61.1	72.2	79.9	40.9	44.3	89.6
	(SD)	(13.2)	(11.2)	(11.9)	(17.5)	(14.5)	(7.2)
感情的関与スコア	M	43.9	42.6	77.5	9.6	14.5	84.0
	(SD)	(16.5)	(18.5)	(13.9)	(5.1)	(8.3)	(10.6)

n=1987

第 2 節 調査 2 (T 県の調査)

第 1 項 対象者の個人的属性

調査 2 (T 県の調査) における対象者の年齢、部活動入部状況、生活に関する項目について示した。なお、今回の調査における対象者は公立高校の普通科に通う 1 年生、294 名であった。

1. 対象者の年齢

調査 2 における対象者の年齢の最小値、最大値、平均値および標準偏差を表 10 に示した。

表 10. 調査 2 の対象者の年齢の最大値、最小値、平均値、標準偏差

	n	最大値	最小値	平均値	SD
男子	128	16	15	15.24	0.43
女子	166	16	15	15.14	0.35
全体	294	16	15	15.19	0.39

2. 部活動入部状況

調査 2 の対象者における部活動入部状況については表 11 に運動部への所属状況を、表 12 に文化部への所属状況を示した。

表 11. 調査 2 の対象者の運動部への所属状況

運動部	はい n (%)	いいえ n (%)	合計 n (%)
男子	98 (76.6)	30 (23.4)	128 (100)
女子	58 (35.8)	104 (64.2)	162 (100)
合計	156 (53.8)	134 (46.2)	290 (100)

表 12. 調査 2 の対象者の文化部への所属状況

文化部	はい n (%)	いいえ n (%)	合計 n (%)
男子	30 (26.8)	82 (73.2)	112 (100)
女子	103 (67.8)	49 (32.2)	152 (100)
合計	133 (50.4)	131 (49.6)	264 (100)

3. 生活環境に関する項目

調査 2 の対象者における主な交通手段を図 9 に、通学の所要時間を図 10 に示した。

主な交通手段としては、男女ともに自転車が多く、また、電車が続いて多かった。

通学の所要時間は、全体では 30 分以上 1 時間未満が多く、男子は 10 分以上 20 分未満、女子は 30 分以上 1 時間未満が最も多かった。

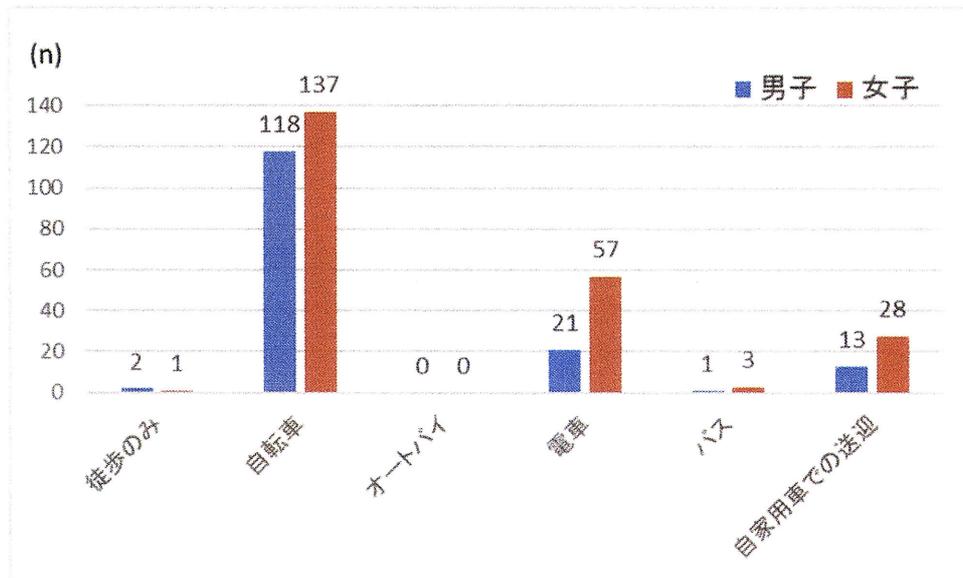


図 9. 調査2の対象者の主な通学手段（複数回答）

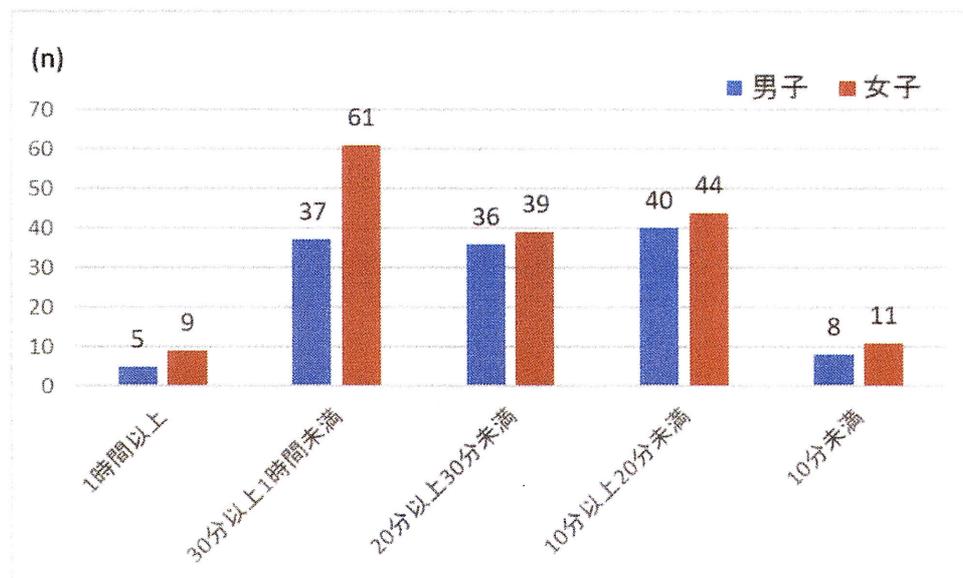


図 10. 調査2の対象者の通学の所要時間

第2項 各尺度の構成概念妥当性の検討

1. スポーツへの関与に関する項目

調査1と同様に、スポーツへの関与に関する7変数を用いて探索的因子分析により因子構造を探索した結果を表13に示した。パラメータの推定値には最尤法を用いた。固有値が1を超えた因子は1つのみであった。第1因子の寄与率は.533であった。このため、SEMを行わなかった。

内的妥当性を示す信頼性係数（ α 係数）は、 $\alpha = .84$ であった。

表 13. 調査2のスポーツへの関与に関する項目における探索的因子分析の結果

質問項目	内容	第1因子
A1-1	スポーツは私の一部である	0.91
A1-2	友達とスポーツについてたくさん話をする	0.79
A1-6	ほとんどのスポーツが得意だ	0.75
B1b	あなたは呼吸が上がる程度の運動を30分以上行う日がどのくらいありますか	0.44
A1-8	スポーツや運動はストレスを解消するのによい方法である	0.72
A1-10	私は健康とフィットネスを意識している	0.68
A1-7	しばらくの間運動をしないと罪悪感を感じる	0.74

n=294

2. 態度に関する因子

表 14 に Sport England が用いた態度に関する 8 因子について、対象者全体における項目の平均値、標準偏差および信頼性係数（ α 係数）を示した。内的妥当性を示す信頼性係数（ α 係数）は、基準値である.70 を超えた因子はなかった。生産性は $\alpha = .14$ を示し、生産性における質問項目である「自由な時間を長く持ちたい」を削除した場合、 α の値が.37まで高くなったため、削除した。この英語原文は、“I like to use my free time productively.”であり、原文の意図をくみ取ることができなかったことが原因であると考えた。

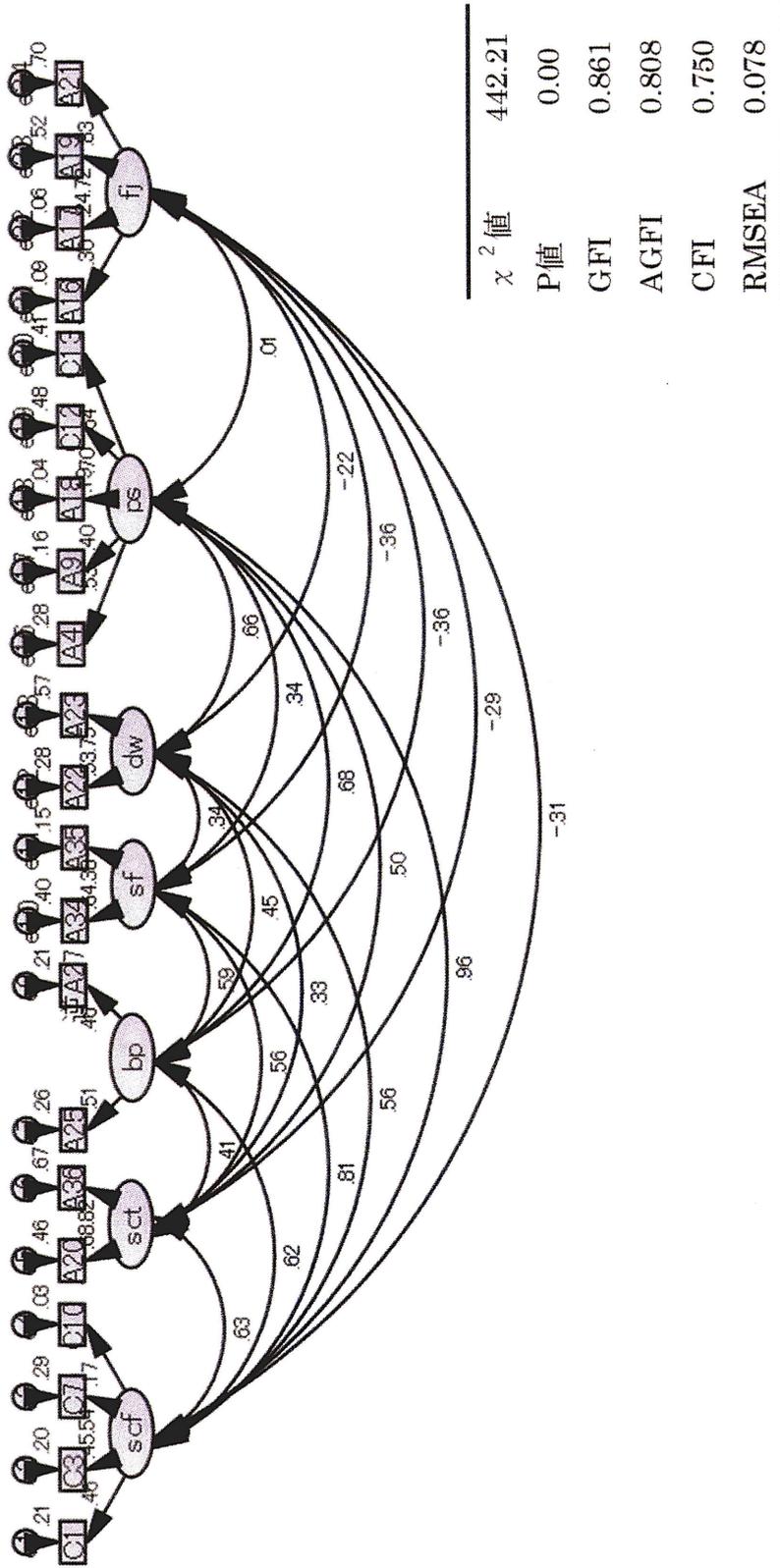
家族の影響は相関分析を行ったところ、.099 と相関が低かったため、独立変数として用いることとした。今回の調査では T 県の高校 1 年生（1 校）に絞り、調査を行ったことからサンプルに偏りが出ていることが考えられた。

また、図 11 に示したように SEM を行った結果、5%水準で全て有意である標準化推定値が得られた。適合度指標は、 $P = .00$ 、 $GFI = .861$ 、 $AGFI = .808$ 、 $CFI = .750$ 、 $RMSEA = .078$ と採択の基準に満たなかった。

表 14. 調査 2 における態度に関する 8 因子の平均値、標準偏差、信頼性係数

因子	項目内容	Mean	SD	α
自信		3.19	0.97	0.47
	自分のために何か行動を起こすことができる	2.71	1.04	
	私は自信家である	3.54	1.17	
	私は楽観主義である	2.71	1.16	
	私が行うこと(スポーツなど)を通じて新しい人に出会うこと や新しい友達が出来るとは喜ばしいことだ	2.01	1.13	
自己満足		2.73	0.70	
	自分の身体に満足している	3.49	1.23	
	自分自身に満足している	3.30	1.17	
生産性		3.38	1.05	
	私は常日頃行なっている日課がある	2.70	1.35	
	私は怠け者である (逆転項目)	3.67	1.11	
自由度		2.31	0.79	
	私には選択の自由がたくさんある	2.29	1.15	
	私は友人の意見をよく受け入れる(寛容である)	2.35	0.83	
勝利への欲求		2.62	1.00	
	競争心が強い、または負けず嫌いである	2.36	1.19	
	勝つことは私にとって最も重要なことである	2.89	1.16	
家族の影響		2.27	0.90	
	家族は運動やスポーツをすることを私に勧めはしない(逆転項目)	2.47	1.33	
	私は家族と仲が良い	2.07	1.08	
スポーツの見方		3.02	0.71	0.62
	スポーツや運動で達成したことをシェアするためにSNSを使いたい	4.14	1.09	
	自分自身が気持ちよくプレーできるようなスポーツに参加したい	1.86	0.91	
	スポーツをしている同年代の人をカッコいいと思う	1.99	1.19	
	運動はまさに私のための時間である	3.63	1.23	
	スポーツをすることでより人気者になれる	3.59	1.19	
判断への不安		2.94	0.83	0.56
	得意でないことに取り組むことが嫌いだ	2.56	1.14	
	みんなが同じようなレベルにあるスポーツをしたい	2.60	1.24	
	運動をしている姿を人に見られることを恥ずかしく感じる	3.37	1.27	
	スポーツや運動をしている時、バカにされていないか心配だ	3.25	1.39	

n=294



χ^2 値	442.21
P値	0.00
GFI	0.861
AGFI	0.808
CFI	0.750
RMSEA	0.078

図 11. 調査 2 の態度に関する 8 因子における SEM の結果

第3項 スポーツへの関与スコアの算出

第2項の1) スポーツへの関与に関する項目の分析を行った結果、1因子のみとなったため、Sport England と異なり「スポーツへの関与スコア」として1つのスコアを用いた。各個人のスポーツへの関与スコアの算出には、回帰法を用いて因子得点を算出した。

$$\text{スポーツへの関与スコア} = -(0.442 \times A1-1 + 0.170 \times A1-2 + 0.141 \times A1-6 + 0.046 \times B1b \\ + 0.131 \times A1-7 + 0.123 \times A1-8 + 0.105 \times A1-10)$$

この結果、スポーツへの関与スコアの値は表 15 の通りとなった。スポーツへの関与スコアが男子の方が女子よりも 22.9 有意に高いことが示された。

表 15. 調査2におけるスポーツへの関与スコアの値と t 検定の結果

		男子 (n=128)	不等号	女子 (n=166)	t 値	p
スポーツへの関与スコア	M (SD)	65.7 (26.8)	>	42.8 (26.0)	7.40	***

第4項 各因子・項目における男女の比較

男女間での比較を行うため、態度に関する8因子、「運動・スポーツをすることが好き」、「運動・スポーツを観ることが好き」、「体育授業が好き」の3項目に t 検定を行った。また、モチベーションを比較するため、 χ^2 検定を行った。

1. 態度に関する8因子における男女の比較

態度に関する8因子における男女の差について、平均値、標準偏差、および t 検定の結果を表 16 に示した。

t 検定を行った結果、自信 ($t = -3.11, df = 292, p < .01$)、自己満足 ($t = -3.75, df = 244, p < .001$)、生産性 ($t = -2.48, df = 289, p < .05$)、勝利への欲求 ($t = -2.32, df = 292, p < .05$)、スポーツの見方 ($t = -3.53, df = 291, p < .001$) において女性が男性よりも有意に高いことを示した。

よって、自信、自己満足、生産性、勝利への欲求およびスポーツの見方が男性の方が女子よりも高いことが明らかとなった。

表 16. 調査2の態度に関する8因子における男女の平均値、標準偏差、t検定の結果

		男子 (n=128)	不等号	女子 (n=166)	t 値	p
自信	M (SD)	2.59 (0.74)	<	2.84 (0.64)	-3.11	**
自己満足	M (SD)	3.12 (1.14)	<	3.59 (0.94)	-3.75	***
生産性	M (SD)	3.03 (1.05)	<	3.31 (0.88)	-2.48	*
自由度	M (SD)	2.34 (0.83)		2.30 (0.76)	0.40	n.s.
勝利への欲求	M (SD)	2.46 (1.07)	<	2.73 (0.92)	-2.32	*
家族の影響	M (SD)	2.33 (0.95)		2.22 (0.87)	1.05	n.s.
スポーツの見方	M (SD)	2.85 (0.73)	<	3.14 (0.68)	-3.53	***
判断への不安	M (SD)	2.96 (0.89)		2.92 (0.78)	0.36	n.s.

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

2. 「運動・スポーツをすることが好き」、「運動・スポーツを観ることが好き」、「体育授業が好き」の3項目における男女の比較

表 17 は、3項目を男女において比較したものを示したものである。

t検定を行った結果、「運動・スポーツをすることが好き」($t = -3.95, df = 285, p < .001$)において有意な差が認められた。このことから、男子の方が女子よりも運動・スポーツをすることが好きである人が多いことが明らかとなった。しかし、「運動・スポーツを観ることが好き」、「体育授業が好き」については、男女の差がないことが明らかとなった。よって、今回のサンプルにおいては「運動・スポーツをすることが好き」についてのみ男女の差があり、男子の方が女子よりも「運動・スポーツをすることが好き」である人が多いことが明らかとなった。

表 17. 調査2の各項目における男女の平均値、標準偏差、t検定の結果

	男子 (n=128)	不等号	女子 (n=166)	t 値	p
運動・スポーツをすることが好き	M 1.98 (SD) (1.27)	<	2.61 (1.42)	-3.95	***
運動・スポーツを観ることが好き	M 2.25 (SD) (1.37)		2.50 (1.33)	-1.57	n.s.
体育授業が好き	M 2.02 (SD) (1.14)		2.29 (1.26)	-1.86	n.s.

***p<.001

3. モチベーションにおける男女の比較

男女における「モチベーションの有無」に関する χ^2 検定の結果を表18に示した。

χ^2 検定を行った結果、目標達成($\chi^2=4.722$, $df=1$, $p<.01$)、成功すること($\chi^2=6.542$, $df=1$, $p<.01$)、競争($\chi^2=9.224$, $df=1$, $p<.01$)、外見を良くすること($\chi^2=9.743$, $df=1$, $p<.01$)、友人と時間を過ごすこと($\chi^2=4.503$, $df=1$, $p<.05$)、家族と時間を過ごすこと($\chi^2=9.369$, $df=1$, $p<.01$)において有意な差が認められた。

男子が女子よりも有意に多かったのは、目標達成、成功すること、競争だった。よって、女子よりも男子の方が、目標達成、成功すること、競争をモチベーションにしていることが明らかとなった。

女子が男子よりも有意に多かったのは、外見を良くすること、友人と時間を過ごすこと、家族と時間を過ごすことだった。よって、男子よりも女子の方が、外見を良くすること、友人と時間を過ごすこと、家族と時間を過ごすことをモチベーションにしていることが明らかとなった。

表 18. 調査2の男女におけるモチベーションの有無に関する χ^2 検定の結果

		はい			いいえ			合計		χ^2 検定
		観測値	(期待値)	残差	観測値	(期待値)	残差	観測値	(期待値)	
目標達成	男子	78	(68.8)	2.2	50	(59.2)	-2.2	128	(128.0)	$\chi^2=4.722$ df=1 **
	女子	80	(89.2)	-2.2	86	(76.8)	2.2	166	(166.0)	
	合計	158	(158.0)		136	(136.0)		294	(294.0)	
成功すること	男子	74	(63.1)	2.6	54	(64.9)	-2.6	128	(128.0)	$\chi^2=6.542$ df=1 **
	女子	71	(81.9)	-2.6	95	(84.1)	2.6	166	(166.0)	
	合計	145	(145.0)		149	(149.0)		294	(294.0)	
競争	男子	33	(23.1)	3.0	95	(104.9)	-3.0	128	(128.0)	$\chi^2=9.224$ df=1 **
	女子	20	(29.9)	-3.0	146	(136.1)	3.0	166	(166.0)	
	合計	53	(53.0)		241	(241.0)		294	(294.0)	
人として 成長すること	男子	53	(54.4)	-0.3	75	(73.6)	0.3	128	(128.0)	$\chi^2=.114$ df=1 n.s.
	女子	72	(70.6)	0.3	94	(95.4)	-0.3	166	(166.0)	
	合計	125	(125.0)		169	(169.0)		294	(294.0)	
何か価値が あることを すること	男子	38	(34.8)	0.8	90	(93.2)	-0.8	128	(128.0)	$\chi^2=.702$ df=1 n.s.
	女子	42	(45.2)	-0.8	124	(120.8)	0.8	166	(166.0)	
	合計	80	(80.0)		214	(214.0)		294	(294.0)	
外見を良く すること	男子	9	(18.3)	-3.1	119	(109.7)	3.1	128	(128.0)	$\chi^2=9.743$ df=1 **
	女子	33	(23.7)	3.1	133	(142.3)	-3.1	166	(166.0)	
	合計	42	(42.0)		252	(252.0)		294	(294.0)	
健康を維持 すること	男子	40	(35.3)	1.2	88	(92.7)	-1.2	128	(128.0)	$\chi^2=1.554$ df=1 n.s.
	女子	41	(45.7)	-1.2	125	(120.3)	1.2	166	(166.0)	
	合計	81	(81.0)		213	(213.0)		294	(294.0)	
楽しいこと	男子	98	(103.6)	-1.7	30	(24.4)	1.7	128	(128.0)	$\chi^2=2.833$ df=1 n.s.
	女子	140	(134.4)	1.7	26	(31.6)	-1.7	166	(166.0)	
	合計	238	(238.0)		56	(56.0)		294	(294.0)	
良い気分 になること	男子	51	(47.5)	0.9	77	(80.5)	-0.9	128	(128.0)	$\chi^2=.745$ df=1 n.s.
	女子	58	(61.5)	-0.9	108	(104.5)	0.9	166	(166.0)	
	合計	109	(109.0)		185	(185.0)		294	(294.0)	
リラックス すること	男子	60	(61.0)	-0.2	68	(67.0)	0.2	128	(128.0)	$\chi^2=.050$ df=1 n.s.
	女子	80	(79.0)	0.2	86	(87.0)	-0.2	166	(166.0)	
	合計	140	(140.0)		154	(154.0)		294	(294.0)	
友人と時間を 過ごすこと	男子	62	(71.0)	-2.1	66	(57.0)	2.1	128	(128.0)	$\chi^2=4.503$ df=1 *
	女子	101	(92.0)	2.1	65	(74.0)	-2.1	166	(166.0)	
	合計	163	(163.0)		131	(131.0)		294	(294.0)	
家族と時間を 過ごすこと	男子	26	(37.9)	-3.1	102	(90.1)	3.1	128	(128.0)	$\chi^2=9.369$ df=1 **
	女子	61	(49.1)	3.1	105	(116.9)	-3.1	166	(166.0)	
	合計	87	(87.0)		207	(207.0)		294	(294.0)	
自主的で あること	男子	13	(12.6)	0.1	115	(115.4)	-0.1	128	(128.0)	$\chi^2=.022$ df=1 n.s.
	女子	16	(16.4)	-0.1	150	(149.6)	0.1	166	(166.0)	
	合計	29	(29.0)		265	(265.0)		294	(294.0)	

*p<.05, **p<.01

第5項 潜在クラスモデルによるクラスタリング

調査1と同様に、潜在クラス分析を行ったところ、表19のようになった。

BICの観点からはクラスター数2が最良であったが、数値が比較的変わらなかったことを受け、Sport England同様に6つのクラスターに分け、分析を行った。

表 19. 調査2のBICの値

クラスター数	2	3	4	5	6	7	8
BIC	12666.5	12677.6	12724.1	12775.2	12828.0	12903.7	12920.4

第6項 潜在クラス分析の結果

1. 各クラスターの特徴

第3項の潜在クラスモデルによるクラスタリングによって分けられた6つのクラスターの特徴を算出した。表20はクラスター別に見た性差・運動頻度、表21は運動部の所属状況、表22は文化部の所属状況を、クロス集計表を用いて表した。また、スポーツへの関与スコアの平均値、標準偏差を表23に表した。これらの表から各クラスターの特徴は次のように要約できる。

クラスター1は、全体の31.8%が属し、男子24.7%、女子75.3%であった。運動頻度は「中」が最も多く41.2%、続いて「高」が34.1%だった。運動部の所属状況は50.6%、文化部の所属状況は56.0%だった。スポーツの関与スコアは平均値よりもやや低い、47.4だった。

クラスター2は、全体の20.6%が属し、男子67.3%、女子32.7%であった。運動頻度は87.3%が「高」であり、運動部の所属状況は98.1%、文化部の所属状況は6.4%と、ほとんどが運動部に所属しているグループだった。スポーツの関与スコアは最も高く、88.8だった。

クラスター3は、全体の18.4%が属し、男子36.7%、女子63.3%であった。運動頻度は「中」が最も多く42.9%、続いて「高」が34.7%だった。運動部の所属状況は26.5%、文化部の所属状況は77.3%と文化部が多いグループだった。スポーツの関与スコアは2番目に低く、25.6だった。

クラスター4は、全体の11.2%が属し、男子3.3%、女子96.7%と大半が女子を占めた。運動頻度は「中」、「低」、「無」が約30%ずつであり、「高」は6.7%だった。運動部の所属

状況は 6.9%、文化部の所属状況は 93.1%であり、ほとんどが文化部に所属していた。スポーツの関与スコアは最も低く、16.1 だった。

クラスター 5 は、全体の 10.5%が属し、男子、女子ともに 50.0%であった。運動頻度は「高」が最も多く、64.3%、「中」が 25.0%であった。運動部の所属状況は 50.0%、文化部の所属状況は 44.4%であった。スポーツの関与スコアは 3 番目に高く 63.6 だった。

クラスター 6 は、全体の 7.5%が属し、男子 90.0%、女子 10.0%と大半が男子を占めた。運動頻度は「高」が最も多く、55.5%、続いて「中」が 25.0%だった。運動部の所属状況は 60.0%、文化部の所属状況は 42.1%であった。スポーツの関与スコアは 2 番目に高く、75.6 だった。

表 20. 調査 2 におけるクラスター別に見た性差・運動頻度 (%)

クラスター		1	2	3	4	5	6
		(n=85)	(n=55)	(n=49)	(n=30)	(n=28)	(n=20)
グループサイズ		31.8	20.6	18.4	11.2	10.5	7.5
性別	男子	24.7	67.3	36.7	3.3	50.0	90.0
	女子	75.3	32.7	63.3	96.7	50.0	10.0
運動頻度	高	34.1	87.3	34.7	6.7	64.3	55.0
	中	41.2	5.5	42.9	30.0	25.0	25.0
	低	15.3	3.6	10.2	30.0	7.1	5.0
	無	9.4	3.6	12.2	33.3	3.6	15.0

表 21. 調査 2 におけるクラスター別に見た運動部の所属状況 (%)

	1	2	3	4	5	6
はい	50.6	98.1	26.5	6.9	50.0	60.0
いいえ	49.4	1.9	73.5	93.1	50.0	40.0

表 22. 調査 2 におけるクラスター別に見た文化部の所属状況 (%)

	1	2	3	4	5	6
はい	56.0	6.4	77.3	93.1	44.4	42.1
いいえ	44.0	93.6	22.7	6.9	55.6	57.9

表 23. 調査2におけるクラスター別に見たスポーツへの関与スコアの平均値、標準偏差

クラスター		1	2	3	4	5	6
スポーツの関与スコア	M (SD)	47.4 (16.7)	88.8 (7.1)	25.6 (16.4)	16.1 (9.7)	63.6 (12.3)	75.6 (21.8)

2. 態度に関する8因子におけるクラスター間の比較

次に、態度に関する8因子におけるクラスター間の平均値、標準偏差および MANOVA の結果を表 24 に示した。また、態度に関する8因子におけるクラスター間の ANOVA の結果を表 25、26 に示した。

態度に関する8因子について、各クラスター間における MANOVA を行った結果、有意な差が認められた ($Wilks'\Lambda=.14$, $F(40, 1110)=15.92$, $p<.001$)。その後の検定によって、8因子すべてにおいて各クラスターの間には有意な差が認められた。自信 ($F(5, 261)=26.29$, $p<.001$)、自己満足 ($F(5, 261)=27.31$, $p<.001$)、生産性 ($F(5, 261)=25.95$, $p<.001$)、自由度 ($F(5, 261)=19.02$, $p<.001$)、勝利への欲求 ($F(5, 261)=22.15$, $p<.001$)、家族の影響 ($F(5, 261)=9.61$, $p<.001$)、スポーツの見方 ($F(5, 261)=43.36$, $p<.001$)、判断への不安 ($F(5, 261)=6.14$, $p<.001$)。

自信については、クラスター3 (3.39) が最も高く、続いてクラスター1 (2.94) が高い結果となり、各クラスター間において有意な差が認められた。ここから、クラスター1、クラスター3は自信が低いことが明らかとなった。

自己満足については、クラスター6 (1.88) と各クラスター間において有意な差が認められ、自己満足度が最も高いことが明らかとなった。また、クラスター2 (2.77) はクラスター1 (3.54)、クラスター3 (4.11)、クラスター5 (3.93) との間にも有意差が認められ、自己満足度がやや高いことが明らかとなった。クラスター3は、クラスター1、クラスター4 (3.30) との間にも有意な差が認められ、自己満足度が最も低いことが明らかとなった。

生産性については、クラスター2 (2.30) と各クラスター間において有意に高いことが認められ、最も生産的に活動しているグループであることが明らかとなった。また、クラスター3 (4.06) と各クラスター間において有意に低いことが認められ、生産的に活動していないグループであることが明らかとなった。

自由度については、クラスター4 (1.65) が、クラスター2 (1.91) を除く各クラスター間と有意な差が認められ、自由度が最も高いことが明らかとなった。クラスター2は、

クラスター1 (2.50)、クラスター3 (2.94)、クラスター6 (2.43) の間に有意な差が認められ、自由度がやや高いことが明らかとなった。また、クラスター3は、クラスター1、クラスター2、クラスター5との間に有意な差が認められ、自由度が最も低いことが明らかとなった。

勝利への欲求については、クラスター3 (3.50) と各クラスター間において有意な差が認められ、勝利への欲求が最も低いことが明らかとなった。クラスター1 (2.74) はクラスター4 (2.83) を除いた各クラスター間と、クラスター4はクラスター2 (1.95) およびクラスター6 (2.08) との間にも有意な差が認められたことから、勝利への欲求がやや低いことが明らかとなった。また、これらのことから、クラスター2、クラスター6は勝利への欲求が高いことが明らかとなった。

家族の影響については、クラスター6 (2.95) が最も高く、クラスター1 (2.17)、クラスター2 (1.79)、クラスター4 (2.32) との間において有意な差が認められた。また、クラスター3 (2.74) は、クラスター1、クラスター2との間で有意な差が認められた。このことから、クラスター3、クラスター6は家族のから受ける影響が少なく、クラスター1、クラスター2は家族から受ける影響が高いことが明らかとなった。

スポーツの見方については、クラスター2 (2.36) が最も低く、クラスター6 (2.56) を除いたクラスター間において有意な差が認められ、スポーツの見方がポジティブであることが明らかとなった。クラスター5 (2.82) とクラスター6は、クラスター1 (3.19)、クラスター3 (3.72)、クラスター4 (3.45) との間で有意な差が認められ、スポーツの見方がやや高いことが明らかとなった。また、クラスター3はクラスター4を除く各クラスターとの間において、有意な差が認められた。よって、スポーツの見方が最も低く、スポーツに対しネガティブな感情が強いことが明らかとなった。

判断への不安については、クラスター3 (2.54) とクラスター1 (3.01)、クラスター2 (3.33) との間で有意な差が認められた。また、クラスター5 (2.65) とクラスター2との間でも有意な差が認められた。ここから、クラスター3とクラスター5において、判断への不安が高く、スポーツを行う際に障壁が多いことが示された。クラスター1とクラスター2は、判断への不安が低いことからスポーツを行う際に障壁が少ないことが明らかとなった。

表 24. 調査2の各クラスター間における
態度に関する8因子の平均値、標準偏差、およびMANOVAの結果

クラスター		1 (n=85)	2 (n=55)	3 (n=49)	4 (n=30)	5 (n=28)	6 (n=20)	F値	p
自信	M	2.94	2.36	3.39	2.40	2.54	2.14	26.29	***
	(SD)	(0.46)	(0.60)	(0.69)	(0.58)	(0.59)	(0.68)		
自己満足	M	3.54	2.77	4.11	3.30	3.93	1.88	27.31	***
	(SD)	(0.74)	(1.00)	(0.76)	(1.15)	(0.88)	(0.70)		
生産性	M	3.25	2.30	4.06	3.38	3.13	3.15	25.95	***
	(SD)	(0.75)	(0.77)	(0.72)	(0.88)	(0.83)	(1.03)		
自由度	M	2.50	1.91	2.94	1.65	2.20	2.43	19.02	***
	(SD)	(0.59)	(0.65)	(0.70)	(0.53)	(0.77)	(1.10)		
勝利への欲求	M	2.74	1.95	3.50	2.83	2.21	2.08	22.15	***
	(SD)	(0.69)	(0.82)	(0.92)	(1.07)	(0.75)	(0.86)		
家族の影響	M	2.17	1.79	2.74	2.32	2.20	2.95	9.61	***
	(SD)	(0.74)	(0.64)	(0.86)	(1.09)	(1.01)	(1.00)		
スポーツの見方	M	3.19	2.36	3.72	3.45	2.82	2.56	43.36	***
	(SD)	(0.33)	(0.45)	(0.49)	(0.70)	(0.66)	(0.92)		
判断への不安	M	3.01	3.33	2.54	2.92	2.65	3.11	6.14	***
	(SD)	(0.54)	(0.61)	(0.78)	(1.07)	(0.94)	(1.35)		

Wilks'Λ=.14, F(40, 1110)=15.92, p<.001

***p<.001

表 25. 調査2の各クラスター間における
態度に関する8因子のANOVAの結果(その1)

	Mean	1	2	3	4	5	6	F値	p
自信								26.29	***
クラスター 1	2.94	—							
2	2.36	***	—						
3	3.39	***	***	—					
4	2.40	***		***	—				
5	2.54	*		***		—			
6	2.14	***		***			—		
自己満足								27.31	***
クラスター 1	3.54	—							
2	2.77	***	—						
3	4.11	**	***	—					
4	3.30			**	—				
5	3.93		***			—			
6	1.88	***	**	***	***	***	—		
生産性								25.95	***
クラスター 1	3.25	—							
2	2.30	***	—						
3	4.06	***	***	—					
4	3.38		***	**	—				
5	3.13		***	***		—			
6	3.15		**	***			—		
自由度								19.02	***
クラスター 1	2.50	—							
2	1.91	***	—						
3	2.94	**	***	—					
4	1.65	***		***	—				
5	2.20			***	*	—			
6	2.43		*		**		—		
勝利への欲求								22.15	***
クラスター 1	2.74	—							
2	1.95	***	—						
3	3.50	***	***	—					
4	2.83		***	**	—				
5	2.21	*		***		—			
6	2.08	*		***	*		—		

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

表 26. 調査2の各クラスター間における
態度に関する8因子のANOVAの結果(その2)

	Mean	1	2	3	4	5	6	F値	p
家族の影響								9.61	***
クラスター1	2.17	—							
2	1.79		—						
3	2.74	**	***	—					
4	2.32				—				
5	2.20					—			
6	2.95	**	***		*		—		
スポーツの見方								43.36	***
クラスター1	3.19	—							
2	2.36	***	—						
3	3.72	***	***	—					
4	3.45		***		—				
5	2.82	*	**	***	***	—			
6	2.56	***		***	***		—		
判断への不安								6.14	***
クラスター1	3.01	—							
2	3.33		—						
3	2.54	*	***	—					
4	2.92				—				
5	2.65		**			—			
6	3.11						—		

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

3. 「運動・スポーツをすることが好き」、「運動・スポーツを観ることが好き」、「体育授業が好き」の3項目におけるクラスター間の比較

表 27 は、「運動・スポーツをすることが好き」、「運動・スポーツを観ることが好き」、「体育授業が好き」の3項目をクラスター間において比較したものを示したものである。運動・スポーツをすることが好き ($F(5, 260) = 49.49, p < .001$)、運動・スポーツを観ることが好き ($F(5, 261) = 14.92, p < .001$)、体育授業が好き ($F(5, 260) = 25.15, p < .001$) のすべてにおいて有意な差が認められた。

「運動・スポーツをすることが好き」については、クラスター3 (3.67)、クラスター4 (3.67) と、各クラスター間について有意な差が認められ、クラスター3とクラスター4は運動・スポーツをすることが好きである人が少ないことが明らかとなった。また、クラスター1 (2.34) はクラスター2 (1.18)、クラスター5 (1.50) およびクラスター6 (1.25)

との間において有意に高いことが認められた。このことから、クラスター2、クラスター5、クラスター6は運動・スポーツをすることが好きである人が多いことが明らかとなった。

「運動・スポーツを観ることが好き」については、クラスター3 (3.67) と、クラスター4 (3.67) を除く各クラスター間において有意な差が認められ、運動・スポーツを観ることが好きである人が少ないことが明らかとなった。クラスター4はクラスター2 (1.18)、クラスター5 (1.50)、クラスター6 (1.25) との間で有意な差が認められ、運動・スポーツを観ることが嫌いである人がやや多いことが明らかとなった。また、クラスター2はクラスター1 (2.34) との間においても有意な差が認められ、クラスター2は運動・スポーツを観ることが好きである人が多いことが明らかとなった。

「体育授業が好き」については、クラスター3 (3.18)、クラスター4 (3.07) と、各クラスター間について有意な差が認められ、体育授業が好きである人が少ないことが明らかとなった。また、クラスター1 (2.02) とクラスター2 (1.25) の間においても有意な差が認められ、クラスター2は体育授業が好きである人が多いことが明らかとなった。

表 27. 調査2の各クラスター間における各項目の平均値、標準偏差、ANOVAの結果

	Mean	(SD)	1	2	3	4	5	6	F値	p
運動・スポーツをすることが好き									49.49	***
クラスター1	2.34	(1.09)	—							
2	1.18	(0.39)	***	—						
3	3.67	(1.42)	***	***	—					
4	3.67	(1.30)	***	***		—				
5	1.50	(0.58)	**		***	***	—			
6	1.25	(0.64)	***		***	***		—		
運動・スポーツを観ることが好き									14.92	***
クラスター1	2.34	(1.09)	—							
2	1.18	(0.39)	***	—						
3	3.67	(1.42)	**	***	—					
4	3.67	(1.30)		***		—				
5	1.50	(0.58)			***	**	—			
6	1.25	(0.64)			**	*		—		
体育授業が好き									25.15	***
クラスター1	2.02	(0.99)	—							
2	1.25	(0.58)	***	—						
3	3.18	(1.22)	***	***	—					
4	3.07	(1.44)	***	***		—				
5	1.89	(0.92)			***	***	—			
6	1.63	(0.90)			***	***		—		

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

3. モチベーションにおけるクラスター間の比較

各クラスターにおける「モチベーションの有無」に関する χ^2 検定の結果を表28、29に示した。

χ^2 検定を行った結果、目標達成 ($\chi^2=100.84$, $df=5$, $p<.001$)、成功すること ($\chi^2=37.72$, $df=5$, $p<.001$)、競争 ($\chi^2=35.75$, $df=5$, $p<.001$)、人として成長すること ($\chi^2=62.62$, $df=5$, $p<.001$)、何か価値があることをすること ($\chi^2=78.81$, $df=5$, $p<.001$)、外見を良くすること ($\chi^2=15.79$, $df=5$, $p<.01$)、健康を維持すること ($\chi^2=51.97$, $df=5$, $p<.001$)、良い気分になること ($\chi^2=14.03$, $df=5$, $p<.05$)、家族と過ごすこと ($\chi^2=11.91$, $df=5$, $p<.05$)、自主的であること ($\chi^2=22.21$, $df=5$, $p<.001$) において有意な差が認められた。

目標達成においては、クラスター2、クラスター4、クラスター5において有意に多く、クラスター1、クラスター5において有意に少ないことを示した。

成功することにおいては、クラスター4、クラスター5において有意に多く、クラスター3において有意に少ないことを示した。

競争においては、クラスター2、クラスター5において有意に多くを表し、クラスター1、クラスター3において有意に少ないことを示した。

人として成長することにおいてはクラスター2、クラスター5において有意に多く、クラスター3、クラスター6において優位に少ないことを示した。

何か価値があることをすることにおいては、クラスター5において有意に多く、クラスター1において有意に少ないことを示した。

外見を良くすることにおいては、クラスター5において有意に多いことを示した。

健康を維持することにおいては、クラスター2、クラスター5において有意に多く、クラスター3、クラスター4、クラスター6において有意に少ないことを示した。

良い気分になることにおいては、クラスター5において有意に多く、クラスター1において有意に少ないことを示した。

家族と過ごすことにおいては、クラスター1において有意に多く、クラスター3において有意に少ないことを示した。

自主的であることにおいては、クラスター4、クラスター5において有意に多く、クラスター3において有意に少ないことを示した。

表 28. 調査2のモチベーションにおける各クラスター間の χ^2 検定の結果 (その1)

		はい			いいえ			合計		χ^2 検定
		観測値	(期待値)	残差	観測値	(期待値)	残差	観測値	(期待値)	
目標達成	1	28	(45.2)	-4.5	57	(39.8)	4.5	85	(85.0)	$\chi^2=100.84$ df=5 ***
	2	49	(29.3)	6.0	6	(25.7)	-6.0	55	(55.0)	
	3	7	(26.1)	-6.0	42	(22.9)	6.0	49	(49.0)	
	4	21	(16.0)	2.0	9	(14.0)	-2.0	30	(30.0)	
	5	28	(14.9)	5.2	0	(13.1)	-5.2	28	(28.0)	
	6	9	(10.6)	-0.8	11	(9.4)	0.8	20	(20.0)	
	合計	142	(142.0)		125	(125.0)		267	(267.0)	
成功すること	1	35	(41.4)	-1.7	50	(43.6)	1.7	85	(85.0)	$\chi^2=37.72$ df=5 ***
	2	32	(26.8)	1.6	23	(28.2)	-1.6	55	(55.0)	
	3	9	(23.9)	-4.7	40	(25.1)	4.7	49	(49.0)	
	4	21	(14.6)	2.5	9	(15.4)	-2.5	30	(30.0)	
	5	22	(13.6)	3.3	6	(14.4)	-3.3	28	(28.0)	
	6	11	(9.7)	0.6	9	(10.3)	-0.6	20	(20.0)	
	合計	130	(130.0)		137	(137.0)		267	(267.0)	
競争	1	9	(15.6)	-2.2	76	(69.4)	2.2	85	(85.0)	$\chi^2=35.75$ df=5 ***
	2	22	(10.1)	4.7	33	(44.9)	-4.7	55	(55.0)	
	3	1	(9.0)	-3.3	48	(40.0)	3.3	49	(49.0)	
	4	7	(5.5)	0.7	23	(24.5)	-0.7	30	(30.0)	
	5	9	(5.1)	2.0	19	(22.9)	-2.0	28	(28.0)	
	6	1	(3.7)	-1.6	19	(16.3)	1.6	20	(20.0)	
	合計	49	(49.0)		218	(218.0)		267	(267.0)	
人として 成長すること	1	32	(37.2)	-1.4	53	(47.8)	1.4	85	(85.0)	$\chi^2=62.62$ df=5 ***
	2	32	(24.1)	2.4	23	(30.9)	-2.4	55	(55.0)	
	3	7	(21.5)	-4.6	42	(27.5)	4.6	49	(49.0)	
	4	16	(13.1)	1.1	14	(16.9)	-1.1	30	(30.0)	
	5	27	(12.3)	5.9	1	(15.7)	-5.9	28	(28.0)	
	6	3	(8.8)	-2.7	17	(11.2)	2.7	20	(20.0)	
	合計	117	(117.0)		150	(150.0)		267	(267.0)	
何か価値が あることを すること	1	9	(22.9)	-4.1	76	(62.1)	4.1	85	(85.0)	$\chi^2=78.81$ df=5 ***
	2	11	(14.8)	-1.3	44	(40.2)	1.3	55	(55.0)	
	3	10	(13.2)	-1.1	39	(35.8)	1.1	49	(49.0)	
	4	12	(8.1)	1.7	18	(21.9)	-1.7	30	(30.0)	
	5	26	(7.6)	8.3	2	(20.4)	-8.3	28	(28.0)	
	6	4	(5.4)	-0.7	16	(14.6)	0.7	20	(20.0)	
	合計	72	(72.0)		195	(195.0)		267	(267.0)	
外見を良く すること	1	11	(11.5)	-0.2	74	(73.5)	0.2	85	(85.0)	$\chi^2=15.79$ df=5 **
	2	7	(7.4)	-0.2	48	(47.6)	0.2	55	(55.0)	
	3	5	(6.6)	-0.7	44	(42.4)	0.7	49	(49.0)	
	4	3	(4.0)	-0.6	27	(26.0)	0.6	30	(30.0)	
	5	10	(3.8)	3.6	18	(24.2)	-3.6	28	(28.0)	
	6	0	(2.7)	-1.8	20	(17.3)	1.8	20	(20.0)	
	合計	36	(36.0)		231	(231.0)		267	(267.0)	
健康を維持 すること	1	18	(23.9)	-1.7	67	(61.1)	1.7	85	(85.0)	$\chi^2=51.97$ df=5 ***
	2	27	(15.4)	3.9	28	(39.6)	-3.9	55	(55.0)	
	3	8	(13.8)	-2.0	41	(35.2)	2.0	49	(49.0)	
	4	3	(8.4)	-2.3	27	(21.6)	2.3	30	(30.0)	
	5	19	(7.9)	4.9	9	(20.1)	-4.9	28	(28.0)	
	6	0	(5.6)	-2.9	20	(14.4)	2.9	20	(20.0)	
	合計	75	(75.0)		192	(192.0)		267	(267.0)	

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

表 29. 調査2のモチベーションにおける各クラスター間の χ^2 検定の結果 (その2)

		はい			いいえ			合計		χ^2 検定
		観測値	(期待値)	残差	観測値	(期待値)	残差	観測値	(期待値)	
楽しいこと	1	75	(69.7)	1.8	10	(15.3)	-1.8	85	(85.0)	$\chi^2=7.96$ df=5 n.s.
	2	42	(45.1)	-1.2	13	(9.9)	1.2	55	(55.0)	
	3	36	(40.2)	-1.7	13	(8.8)	1.7	49	(49.0)	
	4	26	(24.6)	0.7	4	(5.4)	-0.7	30	(30.0)	
	5	25	(23.0)	1.1	3	(5.0)	-1.1	28	(28.0)	
	6	15	(16.4)	-0.9	5	(3.6)	0.9	20	(20.0)	
	合計	219	(219.0)		48	(48.0)		267	(267.0)	
良い気分になること	1	22	(30.2)	-2.3	63	(54.8)	2.3	85	(85.0)	$\chi^2=14.03$ df=5 *
	2	21	(19.6)	0.5	34	(35.4)	-0.5	55	(55.0)	
	3	14	(17.4)	-1.1	35	(31.6)	1.1	49	(49.0)	
	4	14	(10.7)	1.3	16	(19.3)	-1.3	30	(30.0)	
	5	17	(10.0)	2.9	11	(18.0)	-2.9	28	(28.0)	
	6	7	(7.1)	-0.1	13	(12.9)	0.1	20	(20.0)	
	合計	95	(95.0)		172	(172.0)		267	(267.0)	
リラックスすること	1	43	(42.0)	0.3	42	(43.0)	-0.3	85	(85.0)	$\chi^2=4.65$ df=5 n.s.
	2	26	(27.2)	-0.4	29	(27.8)	0.4	55	(55.0)	
	3	28	(24.2)	1.2	21	(24.8)	-1.2	49	(49.0)	
	4	11	(14.8)	-1.5	19	(15.2)	1.5	30	(30.0)	
	5	16	(13.8)	0.9	12	(14.2)	-0.9	28	(28.0)	
	6	8	(9.9)	-0.9	12	(10.1)	0.9	20	(20.0)	
	合計	132	(132.0)		135	(135.0)		267	(267.0)	
友人と過ごすこと	1	52	(46.8)	1.4	33	(38.2)	-1.4	85	(85.0)	$\chi^2=4.62$ df=5 n.s.
	2	30	(30.3)	-0.1	25	(24.7)	0.1	55	(55.0)	
	3	23	(27.0)	-1.3	26	(22.0)	1.3	49	(49.0)	
	4	14	(16.5)	-1.0	16	(13.5)	1.0	30	(30.0)	
	5	18	(15.4)	1.0	10	(12.6)	-1.0	28	(28.0)	
	6	10	(11.0)	-0.5	10	(9.0)	0.5	20	(20.0)	
	合計	147	(147.0)		120	(120.0)		267	(267.0)	
家族と過ごすこと	1	33	(24.2)	2.6	52	(60.8)	-2.6	85	(85.0)	$\chi^2=11.91$ df=5 *
	2	15	(15.7)	-0.2	40	(39.3)	0.2	55	(55.0)	
	3	7	(13.9)	-2.4	42	(35.1)	2.4	49	(49.0)	
	4	8	(8.5)	-0.2	22	(21.5)	0.2	30	(30.0)	
	5	10	(8.0)	0.9	18	(20.0)	-0.9	28	(28.0)	
	6	3	(5.7)	-1.4	17	(14.3)	1.4	20	(20.0)	
	合計	76	(76.0)		191	(191.0)		267	(267.0)	
自主的であること	1	5	(8.3)	-1.5	80	(76.7)	1.5	85	(85.0)	$\chi^2=22.21$ df=5 ***
	2	6	(5.4)	0.3	49	(49.6)	-0.3	55	(55.0)	
	3	0	(4.8)	-2.5	49	(44.2)	2.5	49	(49.0)	
	4	6	(2.9)	2.0	24	(27.1)	-2.0	30	(30.0)	
	5	8	(2.7)	3.6	20	(25.3)	-3.6	28	(28.0)	
	6	1	(1.9)	-0.7	19	(18.1)	0.7	20	(20.0)	
	合計	26	(26.0)		241	(241.0)		267	(267.0)	

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

第7項 クラスタにおける女性の特徴

1. クラスタにおける男女間の比較

女子の特徴を見るため、各クラスタにおける男女差に関する χ^2 検定の結果を表30に示した。

χ^2 検定の結果、有意な差が認められ ($\chi^2=63.86$, $df=5$, $p<.001$)、クラスタ1、クラスタ4において女性が有意に多いことが明らかとなった。そのため、以下にクラスタ1、クラスタ4の特徴を記載した。

表 30. 調査2の各クラスタにおける男女差の χ^2 検定の結果

	男子			女子			合計		χ^2 検定
	観測値	(期待値)	残差	観測値	(期待値)	残差	観測値	(期待値)	
1	21	(34.7)	-3.7	64	(50.3)	3.7	85	(85.0)	$\chi^2=63.86$ $df=5$ ***
2	37	(22.5)	4.5	18	(32.5)	-4.5	55	(55.0)	
3	18	(20.0)	-0.6	31	(29.0)	0.6	49	(49.0)	
4	1	(12.2)	-4.4	29	(17.8)	4.4	30	(30.0)	
5	14	(11.4)	1.0	14	(16.6)	-1.0	28	(28.0)	
6	18	(8.2)	4.7	2	(11.8)	-4.7	20	(20.0)	
合計	109	(109.0)		158	(158.0)		267	(267.0)	

*** $p<.001$

2. クラスタ1の特徴

第5項(1の結果から、クラスタ1はグループサイズ31.8%、男子24.7%、女子75.3%のグループであった。スポーツへの関与スコアは平均よりもやや低い47.4であるが、運動頻度は「高」が34.1%、「中」が41.2%と高く、運動部の所属状況も50.6%であった。表26から、家族から受ける影響が強いことが示され、表29からは、家族と時間を過ごすことが有意に多いことが示された。ここから、クラスタ1は他のクラスタよりも家族との時間や関係を大事にしており、家族の影響があれば運動継続をしていくことが言えることが示唆された。

3. クラスタ4の特徴

第5項(1の結果から、グループサイズ11.2%、男子3.3%、女子96.7%のグループであった。スポーツへの関与スコアは最も低く、16.1であり、運動頻度は「高」が6.7%、「中」から「無」がそれぞれ約3割であった。部活動の所属状況も、運動部が6.9%、文化

部が 93.1%と 9 割以上が文化部という結果であった。また、表 27 から、運動・スポーツをすることが好きという項目が 3.67 と有意に高く、運動が嫌いな人が多いグループであることが明らかとなった。それだけでなく、表 26、29 から、スポーツへの見方が有意に高いこと、健康維持が有意に少ないことから、スポーツや健康であることに重きを置いていないことも示された。しかし、表 28、29 から、男性が有意に多かった目標達成、成功することにおいて女性が多いグループであるクラスター 4 で有意に多く、自主的であることにおいても、有意に多いという結果となった。ここから、クラスター 4 はスポーツではない別のことで目標達成や成功することに向けて努力をしているグループであることが伺えた。

第5章 考察

リサーチクエスチョンである「Sport England で用いられた調査方法や分析方法は、日本においても応用が可能であるのか」について以下のように考察する。

第1節 パーソナリティを算出するための尺度の検討

第1項 スポーツへの関与スコア

スポーツへの関与に関する項目について探索的因子分析を行った。その結果、表5で示した Sport England では感情的関与スコアと理性的関与スコアの2因子だったのに対し、表13で示したT県での調査では、スポーツへの関与スコアは1因子となった。日本では、スポーツに対して感情的・理性的のような概念的に捉える考え方ではないことが伺えた。

平田¹⁰⁾のスポーツイメージに関する研究から、スポーツに対するイメージは「楽ではないもの」であることが明らかとなっている。日本において、スポーツに対して「楽ではなく、努力を必要とするものである」という狭義的なイメージが存在しており、スポーツへの関与スコアが1因子になった要因の一つであることが考えられる。

第2項 態度に関する8因子

表31は、調査1と調査2において用いた態度に関する8因子の信頼性係数(α 係数)を表したものである。調査2では内的妥当性を表す信頼性係数が $\alpha=.70$ を超えたものはなかったが、調査1の Sport England で行われた調査においても、信頼性係数の基準値である $\alpha=.70$ を4因子すべてが超えたわけではなかった。

その後 SEM を行った結果、調査1では概ね良好な値を示したが、調査2では採択の基準に満たない結果となった。しかし、実際に調査を行った Sport England の担当者へのインタビューにより、「本調査は統計的に有意な結果を出すことが目的ではなく、一般的に広く普及することが目的である」ことが明らかとなっている。よって日本においての調査でも統計的な有意差に過度に着目する必要はないと判断した。

また、本調査の結果から、Sport England の質問項目を変更するのではなく、日本独特の文化である体育や部活動から来るイメージを考慮した質問項目を追加することで、より日本に適した調査項目となると考えられた。

表 31. 態度に関する因子における信頼性係数の比較

調査 1 (Sport England の調査)		調査 2 (T 県の調査)	
因子	α	因子	α
Self-confidence	0.74	自信	0.47
Being productive	0.53	生産性	
Perception of sport	0.74	スポーツの見方	0.62
Fear of judgement	0.69	判断への不安	0.56
n=1987		n=294	

第 2 節 潜在クラス分析の結果

調査 1 (Sport England の調査) において、潜在クラス分析を行ったところ、BIC の観点からはクラスター数 10 が最良という結果となった。しかし、Sport England では、クラスター数を 6 つに分類して特徴を算出していた。Sport England は普及をすることを目的にしており、普及という観点からはクラスター数 10 では多いことから、クラスター数を 6 つにしたことが考えられる。

調査 2 (T 県の調査) においては、294 名のサンプルで行われたこともあり、潜在クラス分析の結果はクラスター数 2 が最良という結果となった。調査 1 では 1987 名のサンプルから潜在クラス分析が行われており、複数のクラスターに分けるには、調査 2 のサンプル数が少なかったことが考えられる。今後、日本においてもサンプル数を増やし、6 つのクラスターへの分類が最良となるかを検証する必要がある。

しかし、Sport England と同様に、6 つのクラスターに分類して分析を行ったところ、態度に関する 8 因子、「運動・スポーツをすることが好き」、「運動・スポーツを観ることが好き」、「体育授業が好き」およびモチベーションにおける χ^2 検定のそれぞれにおいて有意な差が認められた。このことから、日本においても 6 つのクラスターに分類し、それぞれの特徴を見ることは有用であることが示唆された。

よって、本研究で設定したリサーチクエスション「Sport England で用いられた調査方法や分析方法は、日本においても応用が可能であるのか」は、学術的な面においては信頼性係数 (α 係数) や SEM の結果から、妥当性を有しているとは言い難いと考えられた。しかし、Sport England で行われた分析の結果も、妥当性を有しているとは言い難いものであったが、その後のキャンペーンにおいてはこの 6 つのパーソナリティタイプが用いら

れた。普及という観点から、本研究において、Sport England で用いられた調査方法や分析方法を用い、6つのパーソナリティで高校生の運動・スポーツの実態を表現していくことは可能であると考えられる。

第3節 クラスタにおける女性の特徴

女性の特徴を見るため、各クラスターにおける男女差に関する χ^2 検定を行った。クラスター1、クラスター4において女性が有意に多いことが明らかとなった。

クラスター4の特徴として、表28、29で示したモチベーションにおいて、目標達成、成功することが有意に多いという結果となった。これは、男女差を比較した表18では、男性の方が有意に多い結果であった。このことから、性別に差があるだけでなく、女性の中でも様々な特徴があることが明らかとなった。よって、男女に分けて考えるだけでなく、個性によって異なるアプローチを行う必要があることが示された。

また、クラスター4はスポーツが嫌いなグループであったが、運動頻度が「高・中」と答えた人が36.7%もいた。しかし、全員が文化部所属であった。その中の8割の人が自転車通学であり、通学時間が30分以上から1時間未満と回答していた。このことから、スポーツが好きだから運動を行うという考え方ではないことが示される。Sport England³³⁾において着目されていた運動を健康のためや、体づくりのために行うという「機能的(functional)」にスポーツを行うという考え方が、日本でも運動実施率を促進するための重要な要素となりうることが伺えた。

第4節 各クラスターの名称

表32に、各クラスターの特徴を加味した、クラスター1からクラスター6のそれぞれの名称を示した。名称の付け方は、表20から表29に示した結果を基に、有意差が示された各クラスターの特徴に着目して命名を行った。

図11は、T県における6つのクラスターから表れた6つのパーソナリティを示した。円グラフがそれぞれクラスターの割合を示し、男女の割合を円グラフ内に示した。この図からも読み取れるように、6つのパーソナリティにおいても人数の割合が異なり、また、パーソナリティにおいても男女の割合が異なることが明らかとなった。

今回の調査は294名のものであり、普及をしていくためにはまだまだ偏りがあるサンプルとなっている。今後サンプルを増やし、新たな調査を行うことで、違ったパーソナリテ

ィが現れることが考えられる。

表 32. 各クラスターの名称

クラスター	名称
クラスター1	友人・家族重視
クラスター2	スポーツ大好き・運動部
クラスター3	リラックス型・文化部
クラスター4	目標達成型・文化部
クラスター5	目標達成型・運動部
クラスター6	Just Fun

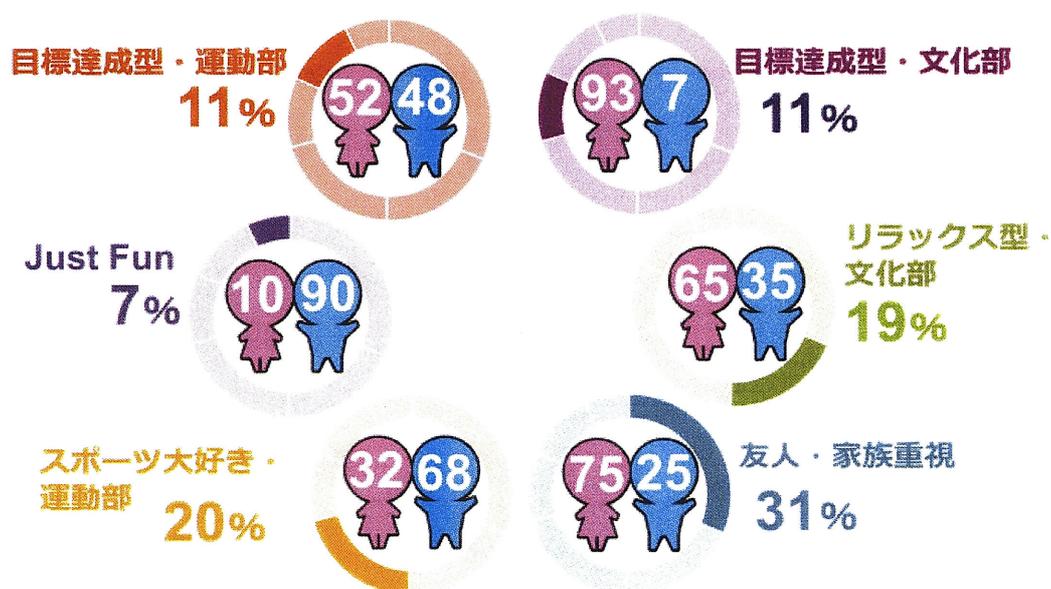


図 12. T 県における 6 つのパーソナリティ

本調査の結果から、パーソナリティの算出方法とそれぞれの特徴を表現することが可能となった。しかし、それぞれの特徴を表現することが高校生の運動・スポーツ実施率を上げるといふゴールではない。今後は、ライフステージや行動変容の段階に合わせて、各パーソナリティの特徴に適応するアプローチ方法を提供する必要があると考えられる。

第6章 結論

第1節 研究の概要

本研究の目的は、日本における女子高校生の運動・スポーツ参加促進のための調査項目の検討を行うことであった。そのため、Sport England で行われた調査内容を再分析し、日本においても応用するため、調査項目の検討を行った。

イギリスで用いられた6つのパーソナリティを算出する方法は、再分析の結果、以下の2点の手順を踏むことで算出できることが明らかとなった。

1. スポーツへの関与スコアで用いられた7項目を探索的因子分析によって因子を算出したのち、最小値を0から最大値を100とし、得点化する。

2. 態度に関する8因子、モチベーション7項目、個人的属性およびスポーツへの関与スコアを潜在クラスモデルで分析する。

また、再分析の結果から内的整合性を示す信頼性係数（ α 係数）とSEMの基準値はグレーゾーンであることが明らかとなった。学術的な面からは妥当性を有しているとは言えなかった。しかし、この分析方法が用いられ行われた、イギリスのキャンペーンは成功しており、普及用としての有用性はあることが示唆された。

日本におけるT県の調査でも、内的整合性を示す信頼性係数は $\alpha = .70$ を超えたものではなく、SEMも採択の基準には満たなかった。しかし、イギリスと同様に6つのパーソナリティに分類することができ、調査に用いられた態度に関する8因子、モチベーションにおいて6つのパーソナリティ間に有意差がみられた。よって、本研究で用いられた調査項目は、日本における女子高校生の運動・スポーツ参加促進のための調査項目として用いることができると考えた。

第2節 研究の限界

本研究において、T県の高校1年生（1校）を対象者にしたことから、サンプルに偏りがあったことが考えられる。

第3節 今後の課題

本研究において明らかとなった今後の課題を以下に示す。

第1項 対象者

本研究では、対象者をT県高校1年生(1校)、に絞って行われたが、今後は対象校を増やし、サンプルを拡大した調査を行うことが必要であると考え。また、対象者の年齢を広げることで、日本においてもスポーツへの関与スコアが理性的・感情的のような形で別れることも考えられる。よって、対象者の年齢を広げ、研究を実施することも必要であると考え。

第2項 研究方法

本研究では、Sport England の調査を基に日本においても応用が可能であるのかを検討するため、研究を行った。日本においても応用が可能であることが検証されたが、日本の文化にそぐわない項目や尺度が含まれている可能性がある。そのため、今後、日本語版の調査項目の精度を検討し、さらなる調査項目の改良をする必要があると考えられる。

引用・参考文献一覧

- 1) Allender, S., Cowburn, G. & Foster, C. (2006). Understanding participation in sport and physical activity among children and adults: a review of qualitative studies. *Health Education Research*, 21(6), 826-835.
- 2) 青木邦男. (1989). 高校運動部員の部活動継続と退部に影響する要因. *体育学研究*, 34(1), 89-100.
- 3) 荒井弘和, 木内敦詞, 浦井良太郎, & 中村友浩. (2009). 運動行動の変容ステージに対応した体育授業のプログラムが大学生の運動習慣に与える効果. *体育学研究*(54), 367-379.
- 4) Bandura, A. (1977). Self efficacy: Toward a unifying theory of behavior change. *Psychological Review*, 84: 191-215.
- 5) ベネッセ教育総合研究所. (2015). 第2回放課後の生活時間調査(2013). Retrieved December 5, 2017 from http://berd.benesse.jp/up_images/research/file_all.pdf
- 6) ベネッセ教育総合研究所. (2015). 小中学生の学びに関する実態調査 報告書 [2014]. Retrieved December 5, 2017 from <http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=4574>
- 7) Coakley, J. & White, A. (1992). Making decisions: gender and sport participation among British adolescents. *Social Sport J* 1992; 9: 20-35.
- 8) Coleman, L., Cox, L. & Roker, D. (2008). Girls and young women's participation in physical activity: psychological and social influences. *Health Education Research*, 23(4), 633-647.
- 9) 橋本公雄. (2010). 運動継続化の螺旋モデル構築の試み. *健康科学*, 32, 51-62
- 10) 平田忠. (2000). スポーツイメージに関する研究(1) —日本人大学生におけるスポーツのイメージ—. *仙台大学紀要* Vol. 31, No. 2, pp.47-58.
- 11) 飯干明, 奥保宏, & 南貞己. (2003). 鹿児島大学教育学部研究紀要. *教育科学編* 54, 21-31.
- 12) 加賀はづき & 石川且. (2006). 「運動嫌い」・「体育嫌い」について ～教師と生徒の相互認識差に着目して～. *仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集* Vol.7, 2006.3
- 13) 窪田辰政. (2013). SAT (構造化連想) 法による教育プログラムが自己イメージ、運

動自己効力感、運動行動の変容段階、身体活動量、およびストレス反応に及ぼす効果
—女子中学生を対象として—。高崎健康福祉大学 2013 年度 博士論文

- 14) 糸野豊, 池田勝, & 山口泰雄. (1979). パス解析によるスポーツ参与の分析. 筑波大学
体育紀要(2), 23-30, 1979
- 15) Lisa O'Keefe. (2016). 第 340 回順天堂医学会学術集会 女性アスリートのサポート
～各国の取り組みを踏まえて～; Staying True to the Insight: THIS GIRL CAN
Campaign
- 16) Marcus, B. & Forsyth, L. H. (2003). Motivating people to be physically active.
Human Kinetics: Champaign, IL. 行動科学を活かした身体活動・運動支援—活動的
なライフスタイルへの動機付け. 下光輝一・中村好男・岡浩一朗訳, 大修館書店: 東
京.
- 17) 松永敬子, 藤本淳也, 松岡宏高, & 小笠原悦子 (2005). 女性のスポーツ参与阻害要因
に関する研究 I — 6 歳以下の子供を持つ母親のスポーツ参加について—. 大阪体育
大学紀要 (36), 71-83.
- 18) 文部科学省. (2012). 子どもの体力向上のための取り組みハンドブック 第 2 章 全
国体力調査によって明らかになったこと. Retrieved December 5, 2017 from
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kodomo/zencyo/1321132.htm
- 19) 鍋谷照 & 徳永幹雄. (2001). 運動継続のための新しいアプローチ. 健康科学, 23, 103-
116.
- 20) 新美尚行. (2015). 体育・スポーツに対するイメージが運動・スポーツ活動実施に及
ぼす影響. 東筑紫短期大学紀要. 第 46 号, 161-178.
- 21) 新美尚行 & 馬場崇豪. (2017). 大学生の運動・スポーツ実施状況に関する実態調査
—運動・スポーツ参与への阻害要因に着目して—. 東海学院大学短期大学部紀要 (43),
45-52.
- 22) 西田俊夫 & 横内靖典. (2003). レジャー活動における「するスポーツ」の楽しみ方
に関する研究 (第 2 報). 城西大学研究年報. 自然科学編 27, 69-93
- 23) Oliver Boo Ltd. (2015). Under the London specific barriers to girls and women
getting active. Retrieved December 5, 2017 from
<https://files.datapress.com/sport/migrate/LSR07%20London%20Sport%20-%20Un%20derstanding%20the%20London%20specific%20barriers%20to%20girls%20and%2>

Owomen%20getting%20active.pptx

- 24) Prochaska, J. O. & DiClemente, C. C. (1983) . Stages and processes of self-change of smoking: Toward an integrative model of change. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 51: 390-395.
- 25) Prochaska, J. O. & Velicer, W. F (1997). The Transtheoretical Model of Health Behavior Change. *The Science of Health Promotion*, 12(1): 38-48.
- 26) 笹川スポーツ財団. (2006). 青少年のスポーツライフ・データ 2006
- 27) 笹川スポーツ財団. (2013). 青少年のスポーツライフ・データ 2013
- 28) 笹川スポーツ財団. (2015). 10代のスポーツライフに関する調査 2015
- 29) 笹川スポーツ財団. (2016). スポーツライフに関する調査 2016 ～スポーツ活動に関する全国調査～
- 30) Sport England. (2005). *Understanding Participation In Sport: A systematic Review*. Retrieved December 5, 2017 from <http://www.cavill.net/app/media/documents/pages/30/SportEnglandreview.pdf>
- 31) Sport England. (2006). *Understanding participation in sport: What determines sports participation among 15-19 year old women?* Retrieved December 5, 2017 from <https://www.sportengland.org/media/3172/understanding-participation-among-15-19-year-old-women-full-report.pdf>
- 32) Sport England. (2012). *How to Develop a Sporting Habit for Life: Final report*. Retrieved December 5, 2017 from <https://www.sportengland.org/media/3828/sporting-habit-for-life-full-report.pdf>
- 33) Sport England. (2014). *Youth Insights Pack*. Retrieved December 5, 2017 from <https://www.sportengland.org/media/10113/youth-insight-pack.pdf>
- 34) Sport England. (2015). *Under the skin*. Retrieved December 5, 2017 from https://www.sportengland.org/media/10233/youth-insight_under-the-skin.pdf
- 35) Sport England. (2015). *Go where women are*. Retrieved December 5, 2017 from https://www.sportengland.org/media/3285/gowherewomenare_final_01062015final.pdf
- 36) Sport England. (2016). *Sport England: Guide to Research*. Retrieved December 5, 2017 from <https://www.sportengland.org/media/11048/sport-england-research->

guide.pdf

- 37) Sport England. (2016). This Girl Can: inspiring millions to exercise. Retrieved December 5, 2017 from <https://www.marketingsociety.com/sites/default/files/thelibrary/Sport%20England%20-%20This%20Girl%20Can.pdf>
- 38) Sport England. (2017). Active Lives Survey 2015-2016. Retrieved December 5, 2017 from <https://www.sportengland.org/media/11498/active-lives-survey-yr-1-report.pdf>
- 39) Sport England. (n.d.). This Girl Can 公式サイト. Retrieved December 5, 2017 from <http://www.thisgirlcan.co.uk/>
- 40) スポーツ庁. (2015). 各年代の運動・スポーツ実施状況及び過去との比較. Retrieved December 5, 2017 from http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2016/10/11/1377987_005.pdf
- 41) スポーツ庁. (2015). 平成 27 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査 集計結果 中学校生徒質問紙. Retrieved December 6, 2017 from http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2015/12/18/1365277_5.pdf
- 42) スポーツ庁. (2016). 平成 28 年度全国体力・運動能力等調査結果 平成 28 年度 調査票 生徒調査票、中学校質問紙. Retrieved December 6, 2017 from http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/kodomo/zencyo/__icsFiles/afieldfile/2016/12/15/1380536_02.pdf
- 43) スポーツ庁. (2017). 第 2 期スポーツ基本計画. Retrieved December 5, 2017 from http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/a_menu/sports/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/03/23/1383656_002.pdf
- 44) 徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄, & 橋本公雄. (1984). スポーツ行動診断検査 (DISC. 1) の作成. 健康科学, 6, 113-127.
- 45) 徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄, & 橋本公雄. (1982). スポーツ行動診断検査の試案. 健康科学, 4, 105-118.
- 46) 徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄, 橋本公雄, & 菊幸一. (1989). スポーツ行動の継続

化とその要因に関する研究（2） —大学生の場合—. 健康科学, 11, 87-98

- 47) Women in sport. (2015). WHAT SWAYS WOMEN TO PLAY SPORT? Retrieved December 5, 2017 from <https://www.womeninsport.org/wp-content/uploads/2015/04/What-Sways-Women-To-Play-Sport.pdf>
- 48) Women in sport. (2015). Understanding Women's Lives. Retrieved December 5, 2017 from <https://www.womeninsport.org/wp-content/uploads/2015/09/Understanding-Womens-Lives.pdf>
- 49) Women's Sport and Fitness Foundation. (2009). Barriers to sports participation for women and girls. Retrieved December 5, 2017 from <https://www.lrsport.org/uploads/barriers-to-sports-participation-for-women-girls-17.pdf>
- 50) 吉川麻衣, 山谷幸司, & 笹生心太. (2012). 「運動嫌い」・「体育嫌い」の実態と発生要因に関する研究 —小学生・中学生・高校生における「運動嫌い」と「体育嫌い」の関連性に着目して—. 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集 Vol.13, 2012.3
- 51) 女性スポーツ研究センター. (n.d.). 世界女性スポーツ会議. Retrieved December 5, 2017 from <http://www.juntendo.ac.jp/athletes/internationalconference/iwg.html>

Sports activities and personality classification of young Japanese generation using the youth survey method of Sport England

Yuki Mera
Juntendo University

Abstract

Introduction

Women's participation in sports is declining which has been a serious problem. The rate of women's participation in sport has declined from junior high school to senior high school and reached the bottom at 18 years old which marked 33.7 percent (Japan Sports Agency, 2015).

On the other hand, Sport England launched a campaign called "This Girl Can" in 2014 and succeeded in raising the rate of women's sport and exercise participation. In the background, Sport England has developed a thorough understanding of six different types of young people (Sport England, 2014). However, research method of this study is kept in the black box.

Purpose

The purpose of this study was to develop survey items to investigate why senior high school students in Japan do not take part in sport and physical activities. The survey was to reanalyze the research data used by Sport England, and develop survey items in order to conduct a Japanese survey.

Method

In survey 1, research data of 1997 young people of Sport England were reanalyzed. Confirmatory factor analysis was performed with the collected data to calculate each individual's emotional score and rational score. The items used in the latent class analysis were eight attitudinal factors and seven items concerning motivations in life. In addition, the latent class analysis took into account: gender, age, education, emotional score and rational score.

In survey 2, two hundred ninety four senior high school students in Japan were surveyed. The research method was the same as that of survey 1, and MANOVA and Chi-square were conducted to verify the differences between six personalities.

Result & Discussion

In survey 1, it was confirmed that an analysis similar to that of Sport England was possible. In survey 2, the internal consistency did not exceed $\alpha = .70$, and SEM also did not adopt the criteria. Since the purpose of this study was to popularize this method, focusing too much on this was confirmed not necessary. Moreover, research data could be classified into six personalities, and there were significant differences between the six personalities in the eight factors concerning the attitude used for the survey and the motivation.

Conclusion

As a method of expressing the personality of senior high school students, six personalities are considered to be useful.

謝辞

本論文の執筆にあたり、多くの方々のご指導やご協力を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

大学院2年間の指導教員であり、情熱と大きな器を以てご指導して下さった小笠原悦子教授には、心より感謝申し上げます。奇跡的なご縁から小笠原先生と出会い、「この人についていけば何か面白いが起ころ」という直感が働き、順天堂大学大学院に進学することを決意しました。進学前には想像もできなかった大きな研究に携わらせていただき、一回りも二回りも成長することのできた貴重な2年間となりました。小笠原先生から学んだ「新しい事に挑み続ける姿勢」、「人を巻き込む求心力」を強く心に刻むと共に、2年間の自信と成長を胸に今後も挑戦していきます。

主査である鯉川なつえ先任准教授には、的確かつ広い視野を持ったご指導をしていただいたことに心より感謝申し上げます。鯉川先生のご指導を受け、より良い修士論文となったと感じています。副査である伊藤真紀助教は、優しい人柄で日頃から研究の助言だけでなく、親身にご指導いただいたことに心より感謝申し上げます。伊藤先生から頂いた様々な助言を、今後も生かしていきたいと思えます。

また、共同研究としてお世話になった中央大学の加藤俊一教授、酒折文武准教授、加藤研究室の皆様にも感謝申し上げます。さらに、本研究において多大なるご支援をしていただいた Lisa O'keefe、女性スポーツ研究センターの皆様にも心より感謝申し上げます。

研究室の先輩・後輩の皆様、同期の皆様に心より感謝申し上げます。皆様のやる気やそれぞれの強みに刺激されたことで、この2年間で有意義かつ成長できるものとなりました。

最後に、大学院まで進学させてくださり、日々サポートしてくれた家族に深く感謝申し上げます。素晴らしい経験ができたのも、家族の支えがあってこそでした。

誰一人欠けていたとしても、この充実した2年間は成り立ちませんでした。皆様にこの恩を少しでも返すことができるよう、日々精進してまいります。

本研究に対しご指導、ご協力いただいたすべての方に、改めて心より感謝の意を込めて本論文の謝辞とさせていただきます。誠にありがとうございました。

2018年2月5日

目良夕貴

添付資料：質問紙

3. あなたの現在の日常生活についてお聞きします。最もあてはまる番号を1つ選んで○をつけてください。

(1) 平日の平均睡眠時間はどのくらいですか。

① 9時間以上	② 8時間以上9時間未満	③ 7時間以上8時間未満
④ 6時間以上7時間未満	⑤ 5時間以上6時間未満	⑥ 4時間以上5時間未満
⑦ 4時間未満		

(2) 朝食を食べますか。

① 必ず食べる	② ほとんど毎日食べる	③ 食べない日が多い
④ ほとんど食べない	⑤ 全く食べない	

(3) 排便はありますか。

① 1日に1回ある	② 2日に1回ある	③ 3~4日に1回ある	④ 1週間に1回ある
-----------	-----------	-------------	------------

(4) 1日のテレビや動画の視聴時間はどのくらいですか。

① 4時間以上	② 3時間以上4時間未満	③ 2時間以上3時間未満
④ 1時間以上2時間未満	⑤ 1時間未満	⑥ 見ない

(5) 1日にゲームをする時間はどのくらいですか。

① 4時間以上	② 3時間以上4時間未満	③ 2時間以上3時間未満
④ 1時間以上2時間未満	⑤ 1時間未満	⑥ しない

(6) 1日に携帯・スマートフォンを使用する時間はどのくらいですか。

① 4時間以上	② 3時間以上4時間未満	③ 2時間以上3時間未満
④ 1時間以上2時間未満	⑤ 1時間未満	⑥ しない

4. あなたの現在の生活環境についてお聞きします。

(1) 主な通学手段は何ですか。あてはまる番号全てに○をつけてください。

① 徒歩のみ	② 自転車	③ オートバイ	④ 電車
⑤ バス	⑥ 自家用車での送迎		

(2) 通学の所要時間はどのくらいですか。最も近いものに○をつけてください。

① 1時間以上	② 30分以上1時間未満	③ 20分以上30分未満
④ 10分以上20分未満	⑤ 10分未満	

(3) 現在、身体活動を伴う手伝いをしていますか。「はい」または「いいえ」のどちらかに○をつけてください。

(例：漁業・水産業、農業、林業、土木関係など)

はい	いいえ
----	-----

(3)で「はい」と答えた方にうかがいます。

(3-a) 平日1回の実施時間はどのくらいですか。最も近いものに○をつけてください。

① 3時間以上	② 2時間以上3時間未満	③ 1時間以上2時間未満
④ 30分以上1時間未満	⑤ 30分未満	⑥ 全くしない

(3-b) 休日1回の実施時間はどのくらいですか。最も近いものに○をつけてください。

① 8時間以上	② 7時間以上8時間未満	③ 6時間以上7時間未満
④ 5時間以上6時間未満	⑤ 4時間以上5時間未満	⑥ 3時間以上4時間未満
⑦ 2時間以上3時間未満	⑧ 1時間以上2時間未満	⑨ 30分以上1時間未満
⑩ 30分未満	⑪ 全くしない	

 裏へつづく

5. あなた自身のことについてお聞きします。次の1～57までのそれぞれの項目について、「1 あてはまる」から「5 あてはまらない」までの5段階の中から1つだけ選んで○をつけてください。

		あてはまる			あてはまらない	
1	スポーツは私の一部である	1	2	3	4	5
2	しばらくの間運動をしないと罪悪感を感じる	1	2	3	4	5
3	自由な時間を長く持ちたい	1	2	3	4	5
4	健康や体力を意識している	1	2	3	4	5
5	私は常日頃行なっている日課がある	1	2	3	4	5
6	ほとんどのスポーツが得意だ	1	2	3	4	5
7	スポーツや運動はストレスを解消するのに良い方法である	1	2	3	4	5
8	友達とスポーツについてたくさん話す	1	2	3	4	5
9	スポーツや運動で達成したことをシェアするためにSNSを使いたい	1	2	3	4	5
10	私には選択の自由がたくさんある	1	2	3	4	5
11	私は怠け者である	1	2	3	4	5
12	家族は運動やスポーツをすることを私に勧めはしない	1	2	3	4	5
13	自分の身体に満足している	1	2	3	4	5
14	競争心が強い、または負けず嫌いである	1	2	3	4	5
15	私は家族と仲が良い	1	2	3	4	5
16	自分自身に満足している	1	2	3	4	5
17	みんなが同じようなレベルにあるスポーツをしたい	1		3	4	5
18	勝つことは私にとって最も重要なことである	1	2	3	4	5
19	私は友人の意見をよく受け入れる(寛容である)	1	2	3	4	5
20	自分自身が気持ちよくプレーできるようなスポーツに参加したい	1	2	3	4	5
21	運動をしている姿を人に見られることを恥ずかしく感じる	1	2	3	4	5
22	スポーツをしている同年代の人をカッコいいと思う	1	2	3	4	5
23	スポーツや運動をしている時、バカにされていないか心配だ	1	2	3	4	5
24	もしスポーツや運動ができなくなったら人生に喪失感を感じる	1	2	3	4	5
25	スポーツや運動のために時間を作る	1	2	3	4	5
26	友人がそのスポーツに興味がないとしても、私はそのスポーツをするだろう	1	2	3	4	5
27	スポーツをすることで恩恵を受けたことはない	1	2	3	4	5
28	直接会話をするよりもオンラインでの会話を好む	1	2	3	4	5
29	スポーツは私のような人のためのものではない	1	2	3	4	5
30	自分自身を限界まで追い込むことが好きである	1	2	3	4	5
31	友人と連絡を取り続けることが得意である	1	2	3	4	5
32	私にはアドバイスが必要な時に頼れる人がいる	1	2	3	4	5
33	楽しくはないが得意なことよりも、得意ではないが楽しいことをしたい	1	2	3	4	5

あてはまる

あてはまらない

34	他の人がどう思っているのかが気になる	1	2	3	4	5
35	お金を使うよりも貯めたい	1	2	3	4	5
36	得意でないことに取り組むことが嫌いだ	1	2	3	4	5
37	新しいことに挑戦するのが好きだが、しばらくすると興味がなくなることが多い	1	2	3	4	5
38	私は行きたいところへの行き方は他人任せである	1	2	3	4	5
39	私は友達よりも使えるお金が少ないと感じる	1	2	3	4	5
40	自分自身について話すときに着飾る	1	2	3	4	5
41	オンライン上での私のイメージには注意を払う	1	2	3	4	5
42	ルールに従うことが好きではない	1	2	3	4	5
43	スポーツをすることで外見が良くなる	1	2	3	4	5
44	私がスポーツや運動をする唯一の理由は、外見を良くしたいからである	1	2	3	4	5
45	自分のために何か行動を起こすことができる	1	2	3	4	5
46	私は自信家である	1	2	3	4	5
47	私は楽観主義である	1	2	3	4	5
48	運動はまさに私のための時間である	1	2	3	4	5
49	スポーツをすることで、もっと人気者になれる	1	2	3	4	5
50	私が行うこと(スポーツなど)を通じて新しい人に出会うことや新しい友達が出来るとは喜ばしいことだ	1	2	3	4	5
51	いつも睡眠が足りている	1	2	3	4	5
52	私はいつも健康だ	1	2	3	4	5
53	私は常に体型の変化に気を配っている	1	2	3	4	5
54	私は体力に自信がある	1	2	3	4	5
55	私は運動・スポーツをすることが好きだ	1	2	3	4	5
56	私は運動・スポーツを観ることが好きだ	1	2	3	4	5
57	私は体育授業が好きだ	1	2	3	4	5

6. あなたは生活の中で何を大事にしていますか。あてはまる番号全てに○をつけてください。

① 目標達成	② 成功すること	③ 競争
④ 人として成長すること	⑤ 何か価値があることをすること	⑥ 外見をよくすること
⑦ 健康を維持すること	⑧ 楽しいこと	⑨ 良い気分になること
⑩ リラックス(くつろぐ)こと	⑪ 友人と時間を過ごすこと	⑫ 家族と時間を過ごすこと
⑬ 自主的であること	⑭ その他()	

質問は以上です。ご協力いただきありがとうございました。



女性スポーツ研究センター